

ギヤスケル論集

第 30 号

松村昌家先生追悼号

2020

日本ギヤスケル協会

役員名簿			
会 長	大野 龍浩	(立正大学教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
			全体の責任者・『ギヤスケル論集』編集委員
副 会 長	松岡 光治	(名古屋大学大学院教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
			HP管理・『ギヤスケル論集』編集委員
事務局長	芦澤 久江	(静岡英和学院大学短期大学部教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
			事務局 (事務局長)・英国協会連絡
幹 事	宇田 和子	(埼玉大学名誉教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
			『ギヤスケル論集』編集委員
	遠藤 花子	(日本赤十字看護大学専任講師)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	閑田 朋子	(日本大学教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	齊木 愛子	(熊本大学非常勤講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	瀧川 宏樹	(大阪工業大学特任講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	玉井 史絵	(同志社大学教授)	第16・17期 (2018年4月～2022年3月)
	西垣 佐理	(近畿大学准教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	松本三枝子	(愛知県立大学名誉教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	村山 晴穂	(元三育学院短期大学教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
会計監査	猪熊 恵子	(東京医科歯科大学准教授)	第17期 (2020年4月～2022年3月)
	早川友里子	(大妻女子大学専任講師)	第17期 (2020年4月～2022年3月)

— 日本ギヤスケル協会倫理規程 —

日本ギヤスケル協会は、協会設立の目的を推進するために、以下の規定を定める

1. 会員は、人種、国籍、性別、障害などのいかにかわらず、すべての人に対して公平かつ誠実に行動しなければならない。
2. 会員は、学会内外の活動において、すべての人のプライバシーおよび人権を尊重し、社会人としての規範を守らなければならない。
3. 会員は、他の研究者の研究・および発表・発言の自由を尊重しなければならない。
4. 会員は、研究成果を公表する際、盗用、改竄、その他不正な行為をしてはならない。
5. 『ギヤスケル論集』に掲載された論文は、著作権は投稿者に、著作権は日本ギヤスケル協会に帰属する。『ギヤスケル論集』に掲載された論文を著書などに収録する際は、その旨、断り書きをする。

ギヤスケル論集

第30号

松村昌家先生 追悼号

2020

日本ギヤスケル協会

故
松村昌家
大手前大学教授



松村昌家先生 《略歴》

- 1929年11月21日 奈良県に生まれる。
- 1953年 3月 大阪外国語大学英語科卒業
- 1957年 3月 大阪市立大学英文科大学院修士課程修了
- 1960年 4月 天理大学外国語学部講師
- 1965年 4月 同志社大学商学部講師
- 1966年 4月 同志社大学商学部助教授
- 1970年 4月 同志社大学商学部教授
- 1972年 4月 神戸女学院大学文学部教授
- 1985年 4月 甲南大学文学部教授
- 1996年 4月 大手前大学大学院文学研究科教授
- 2001年10月 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 初代会長
- 2007年 4月 大手前大学名誉教授
- 2019年 9月 9日 逝去 享年90（満89歳）

《主な業績》

主要著書

- 『ディケンズとロンドン』研究社出版、1981年
『明治文学とヴィクトリア時代』山口書店、1981年
『水晶宮物語 ロンドン万国博覧会 1851』リプロポート、1986年
『ディケンズの小説とその時代』研究社出版、1989年
『ヴィクトリア朝の文学と絵画』世界思想社、1993年
『十九世紀ロンドン生活の光と影 リージェンシーからディケンズの時代へ』
世界思想社、2003年
『文豪たちの情と性へのまなざし 逍遙・漱石・谷崎と英文学』ミネルヴァ書房、
2011年
『ヴィクトリア朝文化の世代風景 ディケンズからの展望』英宝社、2012年
『大英帝国博覧会の歴史 ロンドン・マンチェスター二都物語』ミネルヴァ
書房、2014年
ほか多数

主な監修

- 『ロンドン万国博覧会 新聞雑誌記事集成』3巻、本の友社、1996年
『ヴィクトリア朝テーマ別シリーズ〈移民と植民地政策〉雑誌記事集成』本
の友社、1997年
ほか多数

主な翻訳

- アンガス・ウィルソン 『ディケンズの世界』英宝社、1979年
『「パンチ」素描集 19世紀のロンドン』岩波文庫、1994年
ほか多数

追記

本稿作成にあたり、松村昌家教授古稀記念論文集刊行会『ヴィクトリア朝文学・文化・歴史』（英宝社、1999年）所収の年表・業績表を参照しました。また大阪学院大学短期大学部永岡規伊子先生のご協力を頂きました。感謝申し上げます。
（『ギヤスケル論集』編集委員長 西垣佐理）

目 次

追悼 松村昌家先生

- 松村昌家先生追悼—— お送りしなかったメール
..... 鈴江 璋子 1
- See You in the Next World, Professor Matsumura!
..... 大野 龍浩 5

講演

- 『親戚のフィリス』再考—— 「祈り」に着目して
..... 足立 万寿子 7
- 求婚を拒絶する女たち—— マライア・フルアート、イーダ・ロセメリ、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル——
..... 鈴木 美津子 23

論文

- エリザベス・ギヤスケルの障害者表象
..... 星 志乃 39
- イギリス 19 世紀中期小説の黒人の表象あるいは不在
—— 『虚栄の市』と『クランフォード』を例に——
..... 石塚 裕子 57

書評

- 日本ギヤスケル協会編『創立 30 周年記念 比較で照らすギヤスケル文学』
..... 直野 裕子 73
- 日本ギヤスケル協会会則..... 81
- 編集後記..... 82

松村昌家先生追悼

— お送りしなかったメール —

鈴江 璋子

〈マイドキュメント〉の片隅に、松村昌家先生、と宛名を書いたまま、お送りしなかったメールがある。日付は2009年10月27日。日本ギヤスケル協会第21回全国大会の直後であり、まず大会にご出席頂き、大会でも、懇親会でも、貴重なご発言を頂いたことへのお礼を申し述べている。当時私は会長職に在ったから、職務上当然の礼儀である。そして「マーチャント、マンチェスター、大阪」と熱を込めておっしゃったのが心に残りました」と書いている。

当時はマンチェスターも大阪も、それぞれ首都に次ぐ、その国第二の都市であつて、大阪は「煙の都」「水の都」と呼ばれるほどに迫力ある大商工業都市であり、マンチェスターも、産業革命の中心として綿工業で栄えた大商工業都市であつたから、両都市が肩を並べるのはむしろ当然と感じられた。

当時講師を勤めていた町田市の読書会で、その話をしたところ「そうです、その通りです。大阪も紡績で栄えた町で、私が子供の頃は煙突から石炭を焚く黒い煙がもくもく出ていて、朝と夕方に廊下を拭き掃除すると、雑巾が真っ黒になったものでした」という反応が御座にあつた。たぶん朝鮮戦争の特需で、イトヘン景気に沸いた時代の話だろう、と考え「そういえば、クラボウとか、東亜紡、呉羽紡など、大きい会社はみな紡績会社でしたね」と返したら「そうです。そういう会社はみな、大阪に工場があつたんです。紡績には水が必要で、淀川の水をジャブジャブ使つて、織物を洗つたのです」と答えられ、改めて驚いたのだった。私は染物に水が必要なことは、よく知っていたけれど、紡績に水が必要だとは知らなかつた。マンチェスターに、そんなに水があるのだろうか、淀川と肩を並べるような、大きな川があるのだろうか。水に関して疑問を持ちながら、私は松村先生に提案している。

「先生、自分でもの言えない町や土地のことは、人間が記憶して、語り継がなければなりません。先生の〈マーチャント、マンチェスター、大阪〉を拡大し

て、土地と文学をインターフェイスしたシンポジウムを、来年、2010年のヴィクトリア朝文化研究学会の大会で、開いて頂けないでしょうか。文学に描かれたのではなく、現実の町のたたずまいと変貌を語ることが出来る、実際の住人の大阪話やマンチェスター話、自分で紡績業を営んだ人の話を聞くのは、いかがでしょうか？戦争にからんで、マーチャントが巨大な富を動かし、政治を動かすのも確かなことで、国のモラルを検証することも必要です。」

このメールをお送りしなかったのは、2010年に、エリザベス・ギヤスケル生誕200年を記念して、その名と業績がウエストミンスター寺院の詩人コーナーの窓に刻まれる、という祝典があるのを知ったからだだった。それに出席しよう、実際にマンチェスターを見て、その後、然るべき提案を、と考えたのだった。

だが、2010年のマンチェスターは、想像とは全く異なっていた。宿泊したブリタニア・ホテルが、織り上がった綿布を収納する倉庫を改装したもので、上階には窓がない構造だったが、ほかに往時をしのぶ要素は何一つなかった。

アーウェル川は狭く深い野生的な川で、淀川の足元にも全く及ばない。紡績に利用されたのは運河や、Piccadilly basin、Ontario basinなどの巨大な人造池であったろう。運河の大半は埋め立てられてしまったが、いくつかは残されていて、豊かな量の水が、満々と、静かに、建物を囲んでたゆたい、流れる。人間が利用する機能としての、巨大な量の水に圧倒された私に＜マーチャント、マンチェスター、大阪＞を考える余裕はなかった。

帰国後、松村先生から「マンチェスター美術名宝博覧会に使われた建物は、まだ残っていますか」とお尋ねがあったとき、私は「はい、プールがある、大型の体育施設になっています」とお答えできた。プールにしては妙に典雅な装飾があるのが気になって、確かめておいたのだった。

ここで妙に思い出されるのが「京都がパリと似ているのは、川が町の真ん中を流れているからではない」という一言である。京都はパリと姉妹都市なのだが、たぶんそれが決まったときに、誰か、おそらく京都学派の京都人が言った言葉だろう。地政学的に、ではなくて、歴史・文化、そして国の、いや、実は世界の中心であるという点で、京都はパリに似ているのだ、と言いたい京都人の矜持の、京都らしく面倒な表現なのだと思ふ。

マンチェスターは現在、鹿児島県と姉妹都市になっている。だが、少々違う気

もする。松村先生がマンチェスターを、規模も地勢も、住民の気質も違う大阪と並べられたのは、先生がこの二つの土地の上に、ひとしく熱い愛を注がれていたからなのだ。

松村昌家先生は学部も大学院も大阪で修められ、同志社大学教授・神戸女学院大学教授・甲南大学教授を経て、大手前大学教授になられた。非常に博識でありながら、よく整理された学風で、明快かつ実証的であり、魅力的である。〈知っていることも教えない〉京都学派とは違って、知識のない人間にも理解できるように、懇切にご指導くださり、ひとの苦勞が分かる先生のように、私は思った。ギヤスケル協会が関西で大会を開くときには会場をご提供くださり、来日したジョウン・リーチさんを晩餐にお招きくださった。お住まいはずっと京都市右京区である。先生の京都・大阪・マンチェスターについての、英文学者・比較文学者としてのお考えを、一度、ゆっくり伺っておきたかった。

(日本ギヤスケル協会第2代会長 実践女子大学名誉教授)

See You in the Next World, Professor Matsumura!

大野 龍浩

私には何となく近寄りたいたい方だった。あまりにも重鎮過ぎて……。だから、学会でお目にかかっても、遠くから会釈するだけで、気づいていただけないことも多かった。

その印象が少し変わったときが2度ある。

1度目は、2005年7月、Manchester Metropolitan University で開かれた英国ギヤスケル協会の国際大会でのこと。先生はヴィクトリア朝の美術について発表をされた。75歳。その衰えない研究意欲に頭が下がった。あいにく発表時間が重なったので、私は質疑応答の部分しか参加できなかったが、聴衆の大半がこちらの部屋に流れているのを知った。その後、グループで Manchester 市内を散策するツアーがあったが、偶然同じグループになり、そこで一言二言お話することができた。

2度目は、2012年。拙著をお送りしたあとの例会で、「ありがとうございます」と、直接ご挨拶くださったこと。30歳ほど年の離れた若い研究者に、しかも学会でたまに見かける程度の人間に、わざわざ近づいてこられた。もったいなくて感激した。

わたしが先生から学んだことは、なんと言っても、勤勉さ。現役時代はもちろん、定年後も意欲的に英文学研究を続けられた。ご業績の多さがそれを物語っている。1999年(70歳)の時点で、単著だけでも8冊、訳書も単独訳だけで5冊。共著や共訳、論文等を合わせれば、あまりに多くて、生涯業績の完全版はないという。そのうちの『ディケンズとロンドン』(研究社、1981)と『ディケンズの小説とその時代』(研究社、1989)は、私も買い求めた。

『ヴィクトリア朝：文学、文化、歴史』(英宝社、1999)と題した松村昌家教授古稀記念論文集。こういう論文集を企画する発起人がいて、それに賛同して寄稿する人が30数名もいるということ自体が、先生のお人柄を物語っている。

「何事も時がくれば」と題した巻末エッセイには、ディケンズ研究の意義を繰り返して述べられている——「ヴィクトリア朝のイギリスを知るためにはディケンズは不可欠な存在であり、またディケンズの世界を理解するためには、ヴィクトリア朝のイギリス事情に関する知識が必要だ」(534)。確かに。久しぶりに、ディケンズを演習のテキストに取り上げてみよう。

同エッセイには、「八十まで現役とはいわないまでも、もうしばらくこのまま踏みとどまって、あくせくの日を送りつづけたい」(524)とある。享年89。このときから19年も長生きされ、日本中の英文学研究者に影響を与え続けられ、研究姿勢の模範を示された。ただただ頭が下がる。

今頃は来世でディケンズと話をされていることだろう。いずれ私もその仲間に加えていただく日が来るはず。その時により報告ができるよう、現世でできるだけのことをしよう。



International Gaskell Conference at Manchester Metropolitan University, 21 July 2005
左端から2番目、ジャケットを着た後ろ姿の紳士が松村昌家先生

(日本ギaskell協会第6代会長 立正大学教授)

『親戚のフィリス』再考 ——「祈り」に着目して——

足立万寿子

1 序論

(1) 『親戚のフィリス』の先行研究と拙論での観点

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の中編小説『親戚のフィリス』(*Cousin Phillis*, 1863-64)¹ は、多くのギヤスケル研究家が散文による優れた「田園詩」と称賛している (Ward, ed., Knutsford Edition, vol.7 xiv/Easson, ed., George Barnett Smith 545/海老池訳註 (I) 152 など)。小説の舞台となるホープ農場 (Hope Farm) の庭に咲き匂う花々 (229)、太古以来と思われる悠久の自然の中で賛美歌を歌って一日を終える農作業 (231-32)、農場の家畜とともに生活する毎日 (241)、森の中で手一杯に野花を持って小鳥の囀りをまねするフィリス・ホールマン (Phillis Holman) (289) など、自然や自然の中に生きる人々の姿が美しく描かれている。またフェミニズムないしジェンダー研究の点から、少女であったフィリスが初めて恋をし、それに破れるが、それを経て大人の女性へと成長していく過程に注目した研究者 (Bonaparte 230-31/Stoneman 161-69 など) も多い。

さて、拙論の観点だが、『親戚のフィリス』をキリスト教信仰の点から見直してみたい。理由は、ギヤスケルが確固たるキリスト者、中でもユニテリアンであったことによる。ユニテリアン派教会の教えとは、異豊彦先生の言葉をお借りすると、「キリスト教徒と称しうる最少限の信仰内容を保ち、理性は存分に活用し、他の宗教に対しては最大限に開かれた教会、神に特に嘉された人間としてのイエスを模範とする愛の実践によって信仰は全うされる」(異 1、136-37) というものである。

ところで、ギヤスケルは友人イライザ・フォックス (Eliza Fox, ?1823-1903) 宛ての手紙 (Chapple and Pollard 108) の中で、自分は三つの自分から成っている、と言っている。それは、第一の自分は神に尽くす自分、第二の自分は家族や社会に尽くす自分、第三の自分は自分自身に尽くす自分、と解釈できよう (足立

2、11-12)。

このようにユニテリアンであり、こういう自己分析をするギヤスケル、特に第一の彼女が書く小説が自然とキリスト教色を帯びるのは当然のことといえよう。『親戚のフィリス』においても「祈る (pray)」、「祈り (prayer)」、「神 (God)」、「主 (Lord)」、「賛美歌 (psalm)」、また聖句が随所に見出されるほど信仰の痕跡に満ちている。

拙論では、「信仰」関係の中でもエベニーザー・ホールマン (Ebenezer Holman) 師の「祈り」に着目し、他の作中人物の言動なども考慮しながらホールマン師の行動や心理の意味を、ひいてはそこに込められた作者ギヤスケルの思いを解明したい。

(2) 『親戚のフィリス』の小説手法のうち、「視点」について

「視点」はポール・マニング (Paul Manning) に置かれている。「語り手」であるポールが「わたし、ないし僕 (I)」として、若い頃 (主に 19～21 歳の間の約 2 年間) を振り返り、ホープ農場での経験を読者に語っていく。しかもポールは作中人物の一人としても行動する。

2 ホールマン師の「祈り」とその意味

(1) ホールマン師の「祈り」の三分類

ホールマン師の「祈り」は、①牧師として教会堂や訪問説教先の信徒の家で行う「公的な祈り」、②使用人や作男を含め家庭内などで行う「半公的・半私的な祈り」、③全く独りで行う「私的な祈り」の三つに分類できよう。拙論では②と③の「祈り」に注目する。

(2) 農作業後の賛美歌合唱

ポールが初めてホープ農場に泊りがけで滞在する日の夕方、ホールマン師はトネリコ畑で麦刈りを終え、鋤をタクト代わりに振りながら、二人の作男や、そこへポールを連れてきた娘のフィリスとともに賛美歌を歌う (231-32)²。牧師本人は当然、フィリスも豊かな声で歌い、作男たちも歌う。この賛美歌を知らないポールは歌えなかったのだが、「たとえ知っていても、見慣れない情景に喉が詰まっ

て歌えなかっただろう」(232) と言い、その後しばらくは放心状態になり、動けなくなる。

広々とした畑、一方には黒い森、もう一方にはトネリコの木々の間を通して青い遠景が広がっている(同)。この情景の中に響く賛美歌に、敬虔な信者でなくとも、自然と一体となっている神聖な存在、つまり神の霊を感じ取るのではないか。ポールは概して牧師との付き合いは避けたく思っている(221, 223) 若者なのだが、その彼が声が出ず、体が動かなかったのは無意識のうちにそういう霊の作用を感じたためであろう。

キリスト教信仰が生活に溶け込んでいるこの「祈り」から、ホールマン師の心が神と通じ合っており、彼が心の安息を得ている様子が窺える。一方、作男たちを導く有能な農場主として満足しているさまも浮かび上がっている。

(3) ホールマン家の「内輪の夕べの祈り」

麦の刈り株の残る畑で賛美歌を合唱し、農作業を終えた日の晩、使用人や作男たちも含めホールマン家の人々が夕食後、全員が居間に「内輪の夕べの祈り」³に集まっている。滞在客のポールもそこに加わっている。ホールマン師は全員が跪いている輪の中央で跪き、目を閉じ、差し伸べた両手を合わせて、「主の御前に申し上げる (lay before the Lord)」(239) べく、一日の報告を行っている。牧師が飼育している家畜のためにも祈っていることに都会育ちのポールは驚いている。

ホールマン師のこの様子から、彼が病気の牛に汁餌を与える指示を出し忘れたことを反省してはいるが、自分を含め一家が順調なことに満足しているさまが窺える。

(4) ホールズワースの結婚を知った日のホールマン師の「内輪の夕べの祈り」

鉄道技師見習いのポールの上司、ホールズワース (Holdsworth) が鉄道敷設の仕事で急遽カナダへ渡航して9か月ほどしたときのことである。昼食時、ホールマン師は家族の前でホールズワースからの手紙を開き、同封の結婚招待状を見て、その結婚を知る(301)。その後の牧師は落ち着きがない。夕食後、牧師は一家の習慣となっている「内輪の夕べの祈り」を行う(305)が、それについて、ポー

ルはホールマン家に初めて泊まった日の夕食後の場合（拙論2（3）参照）と異なり、詳細に描写していない。つまり、その祈りは形式的なものであったということになる。これは牧師の不安な精神状態を暗示している。

ホールマン師は、「内輪の夕べの祈り」を終えて皆が出て行ったあとポールを呼び止め、フィリスのいつもと異なる様子の原因を問う。ポールが彼女に、ホールズワースの彼女への恋心を伝えたことがあったと答えると、牧師はポールを叱責する。それを漏れ聞いていた彼女がポールを庇うと、牧師は彼女をも咎め、それが彼女の脳炎を引き起こす（307-09）という小説の急展開にさしかかる。

このとき、倒れたフィリスを二階の部屋へ運んだのはホールマン夫人と女の使用人で、医者を呼びに早馬を走らせたのはポールであった。ホールマン師は屈強な体（231）でありながら、フィリスを抱きかかえられないほど腰が抜け、声もかすれる。牧師の精神力の弱さが露呈された出来事であった。

『親戚のフィリス』より5年前に発表されたギヤスケルの短編「マンチェスターの結婚」（“The Manchester Marriage,” 1858）に登場するミスター・オープンショー（Mr. Openshaw）は、自分が意図したのではないが結果的には重婚をしていたことを知ったとき、へたりこみ、声も出ないほど衝撃を受ける。順風満帆で自信満々の彼は絶対間違わないと尊大にも思い込んでいたが、その後謙虚な人間へと変わる（足立3、10-14）。

では、ホールマン師がどのように変わるか、みていこう。

（5）ホールマン師の、フィリス闘病中の「祈り」

フィリスが脳炎に倒れた翌日以降、彼女の回復の兆しが見える日（314）まで、ホールマン師による教会堂や訪問説教先での「祈り」も、ホールマン家内での「内輪の夕べの祈り」も、畑などの屋外での「祈り」も行われぬ。彼はフィリスの重病のため、「公的な祈り」（拙論2（1）参照）も、「半公的・半私的な祈り」も行う気力を失っている。

しかしホールマン師は、妻が看病しているフィリスの部屋の薄暗い片隅に跪き、独り、両手を合わせ熱心に祈る（311）。つまり彼は「私的な祈り」（拙論2（1）参照）は行っている。ポールは牧師の姿を少し開いているドアの隙間から覗き見るが、ドアが閉じられてしまう。

ホールマン師のこの祈りから推測できることは、まず、彼が神にフィリスの回復を願っていることであろう。また、彼はこの事態を招いた自分を振り返り、どこが悪かったのか、つまりどんな「罪 (sin)」を犯しているのか考え、神にも問いかけ、答えを得ようとしていることだろう。

ホールマン師が神に問いかけたと考えられるのは次の状況からである。すなわち、フィリスの病気見舞いを兼ねてロビンスン (Robinson) 師とホジスン (Hodgson) 師がホールマン家に訪問説教にやって来る。ホールマン師は二人の牧師を部屋に通す前にポールに「このようなとき [脳炎に苦しむ娘を看るような苦悩のとき] 魂を助けられるのは神だけだ」(312) と言う。ホールマン師が神に問いかけているからこそ、この発言が出たと思われる。

また、このときホールマン師はポールに訪問説教の場に同席するよう頼む。小説手法の視点がポールにあるので作者ギヤスケルはこう設定したものと思われるが、他方、ホールマン師はこのとき一人で二人の牧師に対応できる自信を失くし、気弱になっていることを示すためもあったと思われる。

ホールマン師は以前、病気の牛の餌の按配を忘れたときには「祝福を求めながらその手立てを忘れるのは偽善だ」(239) と反省したり、「薄ノロ」(245) のティモシー (Timothy) のへまな作業を寝室の窓から見ていて癩癩を起したときには「短気な自分も罪を犯している (I, too, have sinned.)」(同) と反省してはいる。しかしそのような罪はいわば些細な罪といえる。ところが、フィリスが生死の境をさまようほどの重病に倒れる直前にホールマン師がフィリスに発した言葉 (308-09) は極めて身勝手・理不尽で、その行為は些細な罪といって済むようなものではない。

『親戚のフィリス』の7年前に発表されたギヤスケルの短編「聖クララ会修道女」(“The Poor Clare,” 1856) のヒロイン、ブリジエット・フィッツジェラルド (Bridget Fitzgerald) は、「呪いを実現できる能力を自分が具えていると信じて人に不幸がかかるように呪った」(足立2、308) のだから、「重大なことと知りつつ、自由意志から故意に犯す罪」⁴ に堕ちている。

ホールマン師は意図してフィリスを脳炎へ追いやったのではない。しかし彼が娘かわいさのあまりにせよ、また予期せぬことの動転のあまりにせよ、発した酷い言葉によってフィリスが精神的ショックを受け、脳炎を発症したとすると、そ

れは軽々しく「ごめんなさい」と謝って赦されるものではない。彼は独り、妻の看護を受けているフィリスの部屋の隅で祈って、自分の罪に向き合ったものと思われる。

このようにみえてくると、ホールマン師の「祈り」はフィリスの重病まではパフォーマンス的祈りだといえよう。彼は皆の中央にいて、祈りの「先達になって（'leading'）」⁵、言い換えると皆を「導き」、皆に聞こえるように声を出して祈っているからである。しかしフィリスの部屋の隅で祈るのは誰に見せるのでもない、神と自分との誠実で真剣な応答の祈りである。恐らく自分の悪いところをすべてさらけ出しての祈りであったのだろう。その部屋のドアが閉じられれば語り手であるポールには牧師の姿が見えなくなるが、これは作者ギヤスケルの意図であり、ギヤスケルがこの小説で示そうしている「祈り」は、読者も含め他人に見せるようなものではなく、独り、自己を見つめ、神に向かって行うもの、つまり筆者のいう「私的な祈り」ということになるだろう。

ホールマン師はフィリスの病氣見舞いに訪れた二人の牧師たちに優越感を感じていたと思われる。ホールマン師は「馬鹿なやつら」と思っていた二人の牧師と異なって、自分は牧師の務めとしての神学・古典語に秀でているだけでなく、数学・農学・力学などにも興味を持ち、その知識を実際の農牧業に活かし、その作業も熱心に行っている優れた農場主だと自負していたことであろう。そのホールマン師がフィリスの重病を期に我が身を振り返り、神にも問いかけ、自分のどういふ点がいけなかったのかを真剣に考え、自分のおごり、至らなさ、弱さに気づいたと思われる。

ところで、ホールマン師がフィリスのことで自分の過ちに気づく機会はそれまでにないわけではなかった。彼は激しい雷雨に二度遭っている（269-70, 294-95）。「稲妻（lightning）」は「至高神の力または怒りの現れ」（フリース 394）であり、「雷（thunder）」は「至高（天空の）神の声で、雷鳴によって怒りや同意を表す」（同 638）とされている。彼はどちらのときもこれを神からの警告とはとらなかった。

しかしこのような神からの警告がなくとも、また高度な教育を受け、学問の深い知識がなくとも、普通の大人ならホールズワースとフィリスの間の恋愛感情を察知したことだろう。例えば、ホールズワースとポールが鉄道敷設の仕事の休憩時間に、リンゴの収穫に向かうホープ農場の人たちの一行に加わる場面である。

果樹園へ行く途中、ホールズワースが少年時代以来見ていなかった花を見つけ、懐かしい、などと言う。リンゴの収穫を終え、ホールズワースとポールが仕事に戻ろうとしたとき、フィリスはその花を草の葉で結わえて花束にし、ホールズワースに差し出し、受け取った彼の目には恋の表情があらわれているのにポールは気づく(273)。しかしホールマン師はその場にいたのに、それに気づく気配はなかった。

この二人の恋愛感情にはホールマン家の使用人のベティ (Betty) も勘づいている。ベティはポールに「あなたの友だち [ホールズワース] がフィリスさんに不実な仕打ちしたちゅうんなら、ただじゃ済まん」(298) と言う。それに対してポールは「彼が彼女に言い寄ったとは思わない」(同) と言うと、ベティは「口じゃ言わんでも目や手が結構胸のうちをあらわすわ。…ご両親はいまだにフィリスさんを子供だと思つとられるけど。…あん人はあたしにお上手言いながら搾りたての牛乳を猫みたいに飲んで。あんなお体裁飾りの人騙しなんぞ大嫌いじゃ」(298-99) と言う。

因みに、このときベティはホールズワースの偽善性だけでなく、フィリスの父母の親ばかさも見抜いている。学問がなくとも、社会的地位が低くとも、ベティはよほど正しく人を見てとっている。

(6) フィリスを見舞いに来たロビンスン師とホジスン師の訪問説教時の「祈り」

ロビンスン師が祈りの「先達になり ('leading')」(注5参照)、ホールマン師に、神のご命令で独り子を屠ろうとしたアブラハムに倣ってフィリスの回復を諦めるように言う(312)。しかしホールマン師はこう応える——「…そのときが来たら、そしてあなた方がおっしゃるような諦めが必要になったら神さまがお力添えくださるでしょう…」(313) と。

それでもなお、ロビンスン師はホールマン師の罪——農場や学問のことにかまけて神を蔑ろにしたこと、娘を偶像視したこと——を認めよと迫る(同)。ホールマン師はこう抗弁する——「わたしの罪は神さまに告白します。だが、もしその罪が極悪のものであろうと…お怒りになった神さまが罪の罰として苦しみをお与えになることはない、というキリストの御言葉をわたしは信じます」(同) と。それに対してホジスン師がロビンスン師に「これは正統な教えでしょうか (Is

that orthodox?)」(同)⁶と尋ねる。

ところで、「イエスの教えを実践しようとするユニテリアンは、新約聖書に記されているように神は慈悲深く、人間を愛する存在と考え、…性善説をとる」(足立2、7)。ユニテリアンのギヤスケルもそう考え、善人が神に受け容れられるのは当然として、罪人も「犯した罪を心から認識し、償おうと努力すれば神に迎えられる」(同8)と信じていたと思われる。ホールマン師と二人の牧師がやり取りするこの場面で、ギヤスケルはこの信念をホールマン師の口を通して言わせたと考えられる。

この二人の牧師が見舞いに来たあと、ポールは次のように言う——「フィリスの見舞いとして訪問してきたのはこの二人の牧師だけだが、近所の皆が毎日、彼女の容態を心配して、屋敷から出てくる誰かに聞いていた。彼らは家のすぐそばまで近寄るほど不躰けではなかった」(314)と。これは、病魔と闘うフィリスへの近所の人たちの配慮と対照させて、ホールマン家へ同情心を見せつけ、高邁な説教を説きながら同家への迷惑も考えず食事が出るまで帰ろうとしない二人の牧師の厚顔さ(312-14)を強調し、彼らの偽善性を示すためだと思われる。山脇百合子先生はご著書『エリザベス・ギヤスケル研究』の中で「形式的宗教は偽善である」(423)と述べておられるが、その通りであろう。

さらに、この二人の牧師を登場させるギヤスケルの意図は世俗的な牧師への風刺だけでなく、彼女が考える神は「旧約聖書にみられる罪深い人間を罰する恐ろしい神でなく、…人間を愛する慈悲の神である」(足立1、5)ことも示すことだと思われる。

(7) ホールマン家での「内輪の夕べの祈り」の再開と、生活そのものが「祈り」

脳炎の峠となる昏睡状態からフィリスが目覚める。その日、ホールマン家では何日も途絶えていた「内輪の夕べの祈り」が行われる(315)。ホールマン師は祈りの「先達になろう」(注5参照)とするが、涙にむせって声が出ない。そこで、ジョン爺(old John)が代わって祈りをあげ、こう言う——「わしらは口じゃなんも言わなかったども、心の中んじゃあ、全霊込めて神さまをほめたたえてきやしたと思うでやす。今夜は神さまも口に出したお祈りはいらんと申されやしょう」(315)と。

このジョン爺の言葉通り、ホープ農場の皆が「口じゃなんも言わなかった」、つまり、これみよがしな祈りの言葉は言わなくとも、心からフィリスの回復を神に祈り、それにふさわしい行動、つまりフィリス回復に必須の熟睡を可能にするために静かにしていようと努力してきた(314)。これをパールの言葉で言えば「静まり返ったこの数日、われわれの生活そのものが無言の祈りだったのだ (...in these silent days our very lives had been an unspoken prayer.)」(315)となる。

祈りとは、牧師が教会堂などで行う「公的な祈り」や、家庭内などで行う「半公的・半私的な祈り」も祈りだが、個人が神に問いかけつつ、自分の行動を真摯に見つめ、どうすれば神のご意思にかなうことができるか、つまり「愛の実践」を行えるかを真剣に考えること、つまり「私的な祈り」も祈りなのだ。これこそ、ギヤスケルがこの小説で示そうとしている「祈り」であろう。

(8) 「祈りの正しい目的」と「神の摂理」とは？

これについて作者ギヤスケルは次のようにポールに言わせる場面を用意している。すなわちフィリスが、脳炎で倒れる3、4か月前のことだが、ポールに「父と相談して、…内輪の夕べの祈りの中に病気のローヴァ (Rover) のことも入れるのを忘れないようにしたの。すると翌日からローヴァが良くなり出したの」(288-89)と言う。それに続けてフィリスはポールを「祈りの正しい目的や神の摂理 (the right ends of prayer, and special providences)」(289)の話に引き込もうとしたが、ポールは頑としてそれには乗らなかった、という場面である。

このようにポールはフィリスの口から直接「祈りの正しい目的や神の摂理」を聞くことはなかったが、3、4か月後それが、拙論2(7)で挙げた「静まり返ったこの数日、われわれの生活そのものが無言の祈りだったのだ」というパールの言葉で具体的に示される。また、「無言の祈り」は「慈悲の神」の耳には届いている、ということだろう。作者ギヤスケルは、それが読者に説教だと思われぬように直接自分では言わないで、パールの口を通して理解されるように小説を巧みに組み立てたと考えられる。

(9) ポールの、ホールズワース評価の変化

ポールが上司のホールズワースを「英雄」のように尊敬していたことは、ポー

ルの言葉「僕の英雄崇拜 (my hero-worship)」(243) や「僕の英雄 (my hero)」(254) にあらわれている。

ところが、ポールはホールマン家の人々と接するうちにホールズワースへの見方を変えていく。それを示すのはこの小説の Part II 最後の、ポールが彼へ呼びかける発言、すなわち “It is many years since I have seen thee, Edward Holdsworth, but thou wast a delightful fellow! Ay, and a good one too; though much sorrow was caused by thee!” (266) であろう。ポールが彼をファースト・ネームで呼びかけたことは一度もなく、言及したこともない。常に “Mr Holdsworth” か、“Holdsworth” であり、しかも小説の後半では “Mr” をつけていない。そういう中で、ポールが彼をフル・ネームで呼びかけるのはただ一度、この Part II 最後のみである。発言者が相手をフル・ネームで呼びかけたり、言及したりするときには通常、発言者の相手への断固とした態度や判断を踏まえているものである。しかも、このときポールは彼を “you” でなく、“thou” と呼んでいる。従ってこの呼びかけには、彼はもはやポールの上位にいる「英雄」ではなく、同等か下位になっており、ポールの彼への評価の明瞭な変化が読みとれる。さらに、こう呼びかけるのはホープ農場での出来事から何年も経たのち、つまり若かったポールが人生経験を積んだのちは、もう彼は尊敬に値しない、ということであろう。

人生街道とんとん拍子のホールズワースは、仕事上は有能で、付き合うには楽しい男だが、それを離れると人を真に思いやれるような、ユニテリアンらしい「愛の実践」を行える人物ではない、ということになる。

(10) ベティとティモシーの役割

ベティの役割

ベティについては、すでに拙論 2 (5) で示したように、ホールズワースの偽善性や、ホールマン夫婦の、娘フィリスへの親ばかきを見抜いている。また、ホールマン師が行う「内輪の夕べの祈り」(拙論 2 (3) 参照) の最中、「ぐっすり居眠りしていた」(239) ベティは、ホールマン師のこの祈りが、作者ギヤスケルがこの小説で示そうとしている「祈り」ではないことを暗示しているかのようなのである。さらにベティは、病気が治ったにもかかわらずのらくら横になっているフィリスに「みんながフィリスさんのためにできるだけのことをしたんよ。…じゃのに、

元気を出さんとは！」(316)と喝を入れ、人生の再出発を促しもした。

夏の晴れた日(257)、そのベティが屋外に出て、農場の湧き水で牛乳鍋を洗っているという些細な場面(258)を必要とも思えないのにギヤスケルがわざわざ挿入している。それは、日光が湧き水や金物製の鍋に当たって光っている情景を読者に思い描かせるためであろう。「光(light)」は「キリストを表す」(フリース394)し、「水(water)」は「洗礼の水を表し…、キリストのエンブレムである」(同678)からだ。

ティモシーの役割

フィリスにとって、脳炎の峠となる昏睡状態に陥ったとき、最も必要なのは十分な睡眠であった。そのためにティモシーはホールマン家の屋敷周辺に静寂を保つために、誰に言われたのでもなく、小川の橋の欄干に座り、騒音を立てて市のたつ広場に向かう荷車を朝から夕方まで一日中見張り、荷車にホールマン家の屋敷沿いでない別の道を行くように仕向けている(314-15)。しかもこれは、「まぬけで、知恵足らず」(314)と言われ、へまばかりしているティモシーがホールマン師からついに解雇通知を出された(305)あとのことである。ギヤスケルがこう設定したのは、ティモシーが立っていた小川の「水」がベティの場合と同じく、キリストのエンブレムであるためだろう。また、それは「8月の…暑い日」(314)のことで、日光が川の「水」に当たって「光」っていたことだろう。

ホールマン師に解雇されても、その娘のフィリスのために尽くすティモシーは、本人は自覚していないだろうが、牧師に弱点を悟らせる働きを行っている。それは、ポールがティモシーのこの行動を牧師に伝えたとき、牧師が「神さま、お赦しを。わたくしは自惚れて、自負心が強過ぎました。」(316)と言ったことに示されている。その後牧師はティモシーを再雇用し、呑み込みの遅い彼に「能力に合う仕事を与え、やり方も辛抱強く教える」(同)ようになる。つまり牧師は真の自分を知り、自己抑制のできる、忍耐強い人間へと変わる。

ギヤスケルがホールマン家の使用人のこの二人をこう行動させているのは、ホールマン師のように世間的地位が高くもなく、ホールズワースのように世間的成功を収めていなくとも、誰でも信仰の真髄、つまり「愛の実践」を行動であらわすことは可能だとのメッセージを発するためだと考えられる。ポールの言葉を借りると、ホールマン師に自分の欠点や過ちに気づかせ、危機に陥ったフィリス

を救った「英雄」はベティやティモシーのような普通の庶民であった。

3 結論

ギヤスケルがこの小説で伝えようとしたことは、「祈り」とは神に願うだけの他力的なものでなく、神に問いかけつつ自分を見つめ、どうすれば願いを実現できるか、またそれが神のご意思に沿っているかを考え、それを行動に移す、つまり「愛の実践」を行うためにある、ということ、そしてこの「祈り」はそうしようと努力すれば地位・身分に関係なく誰もが行える、ということだといえよう。

注

* 拙論は第31回日本ギヤスケル協会例会（2019年6月1日、関西学院大学大阪梅田キャンパスにて）での講演（「*Cousin Phillis* 再考——「祈り」に着目して）を基にしている。

講演概要は次の通りである。*Cousin Phillis* における「祈り」の意味を考察する中で、「光」（キリストのエンブレム）の働きに注目し、「光」を注ぐ「英雄」が家族であることを示した。さらに岡山出身の坪田譲治（1890-1982）の童話「河童の話」（1927）に目を向け、この作品においても「光」を点す「英雄」が家族であることを指摘した。キリスト教国に生き、生涯確固たるキリスト者であり、信仰抜きでは存在し得ない作品を残したギヤスケル。一方、仏教や神道の日本に生き、洗礼を受けながらキリスト教の明瞭な痕跡が普通見出せない作品を残した譲二。精神風土や信仰への思いが異なる両作家にこういう共通点を発見したときの筆者の驚きと喜び。これを出発点にしてギヤスケルとともに譲二の文学にも取り組めればと、岡山の住民となった筆者は思う。（拙論では、譲二関連の考察は割愛した）

* *Cousin Phillis* はペンギン版（Peter Keating, ed. *Elizabeth Gaskell: Cranford/Cousin Phillis*, London: Penguin Books Ltd, 1976）を使用する。同書からの引用等の出典は（ ）内にページ数のみを記す。当該箇所のと訳はベティとジョン爺の方言を含め、ギヤスケル著海老池訳註を参照しつつ、拙訳である。

1 題名の和訳には『従妹フィリス』（海老池訳註）などがあるが、拙論では『親戚のフィ

リス』とする。理由は「ポールの母親のまたいとこ」(223)がホールマン夫人であり、同夫人の娘がフィリスである、つまりポールとフィリスの関係は正確には日本語でいう「いとこ」ではないためである。英語の“cousin”は日本語の「いとこ」だけでなく「親戚」の意味もある(足立2、547-48)。

- 2 これは「②…「半公的・半私的な祈り」(拙論2(1)参照)の一つにあたる。
- 3 “... the household assembled for prayer. It was a long impromptu evening prayer;...” (239)より、この「祈り」を「内輪の夕べの祈り」と和訳する。これは「②…「半公的・半私的な祈り」(拙論2(1)参照)の一つにあたる。
- 4 「キリスト教における罪の定義は「悪いことと知りながら自由意志をもって神にそむくこと」である。……彼 [アウグスティヌス] は「われわれが罪を犯すのは二つの理由のいずれかによる。一つは、なすべきことがいまだに分かっていない場合であり、もう一つは、なすべきであると分かっていることをしない場合である。前者は無知 (ignorance) ゆえの罪であり、後者は弱さ (weakness) による罪である」といつている…。…グレゴリウス一世はそれにさらに「故意」(set purpose) による罪を付け加えている。」(巽2、1-2, 7)
- 5 ロビンソン師とホジソン師がホールマン家を訪問説教した際、ロビンソン師が「祈り」を始めるが、それは‘leading’ (312) と表現されている。海老池訳註では「先達になり」(II, 285) と和訳されており、筆者はそれをここで借用した。
- 6 “Is that orthodox?” の和訳は、海老池訳註では「今のは正統の教えですか」(II, 291) で、ユーグロウ著宮崎訳では「聖書にそうかいてあるのかね」(749) である。因みに、ユーグロウ氏は “It is certainly not ...” (Uglove 550) と述べている。

引用文献

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. UP of Virginia: Charlottesville, 1992.
- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, ed. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1967.
- Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1991.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester Press, 1987.
- Uglove, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1974.
- Ward, A.W., ed. *The Works of Mrs. Gaskell*. 8 vols. Knutsford Edition. London: Smith, Elder, & Co., 1906; reprinted, New York: AMS Press, 1972.
- 足立万寿子『エリザベス・ギヤスケル——その生涯と作品』東京、音羽書房鶴見書店、2001。……1
- 『エリザベス・ギヤスケルの小説研究——小説のテーマと手法を基に』東京、音羽書房鶴見書店、2012。……2
- 「エリザベス・ギヤスケルの短編「マンチェスターの結婚」再考——小説のテーマと手法と思想の観点から——」『ノートルダム清心女子大学紀要』外国語・外国文学編 第36巻 第1号（通巻47号）（2012）: 1-17。……3
- ギヤスケル, E. C. 著、海老池俊治訳註『従妹フィリス (I) (II)』（研究社新訳註叢書）研究社、(I)1953、(II)1954。（同書を「海老池訳註」と略す）
- 巽豊彦「ニューマン兄弟とギヤスケル夫人」、石井正之助編『饗宴——英学随想・評論集——』東京、ドルフィンプレス、1990、133-43。……1
- 「宗教小説としての *Ruth*」、日本ギヤスケル協会発行『ギヤスケル論集』第2号（1992）: 1-10。……2
- フリース、アト・ド著、山下主一郎主幹、荒このみ他9名共訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984。
- 山脇百合子『エリザベス・ギヤスケル研究』（増補版）東京、北星堂書店、1982。
- ユーグロウ、ジェニー著、宮崎孝一訳『エリザベス・ギヤスケル——その創作の秘密』鳳書房、2007。

(元ノートルダム清心女子大学教授)

***Cousin Phillis* Reconsidered: Focusing on “Prayer”**

Masuko ADACHI

Minister Holman’s “prayer” can be separated into three categories, namely, the public prayer as a minister (①), the half public and half private as a minister and a person in his household (②), and the private as an individual (③). This essay takes the latter two prayers ② and ③ into consideration.

Holman prided himself on being an excellent minister with deep learning in theology and classics, and also on being an able farmer, who could apply his rich knowledge of agriculture and engineering to farming. This is indicated by his prayer ②.

However, he drives his daughter, Phillis, into a critical brain fever by blaming her unreasonably about her first love. In the corner of the room, where his wife is nursing Phillis, he kneels alone in prayer earnestly, and reflects faithfully on what he has said and done, asks God about what has been wrong with him, and recognizes his sins such as self-conceit, impatience, and mental weakness. It is described by his prayer ③.

Servants in Holman’s household practice an “unspoken prayer” in their lives, for example, by keeping the utmost silence necessary for Phillis’ recovery. In his household, Betty, a maid, and Timothy, a farm laborer, play especially important roles, because by their conduct they symbolize Light and Water, emblems of Christ.

Gaskell, a Unitarian, intends to convey in this novella that regardless of scholastic achievement or social status, anyone can practice “Christ’s Love”, the essential Unitarian teaching, through prayer ③. That is to say, anyone can practice “Love” by looking deeply into themselves and considering what they should do for themselves and others, asking God as well, during the prayer ③. The idea is expressed by Phillis’ words, namely, “the right ends of prayer, and special providences”.

求婚を拒絶する女たち

— マライア・フルアート、イーダ・ロセメリ、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル —

鈴木 美津子

ロマン主義時代の英国小説には、社会的地位の高い男性からの求婚を毅然として撥ねつける女性がしばしば登場する。例えば、ロバート・ベイジ (Robert Bage, 1728-1801) の『ハームスプロング、またはあらぬがままの人』(*Hernsprong, or; Man as He Is Not*, 1796、以下『ハームスプロング』と略記) に登場するマライア・フルアート (Maria Fluart)、シドニー・オーエンソン (Sydney Owenson, 1783-1859) の『女性、またはアテネのイーダ』(*Woman; or; Ida of Athens*, 1809 以下、『アテネのイーダ』と略記) のイーダ・ロセメリ¹ (Ida Rosemeli)、ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) のエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) など。求婚の場面がきわめて興味深いのは、求婚という個人的な空間が、政治、国家、宗教などに関する「思想の戦い」(the war of ideas) を丁々発止と行う公共の空間に突然変容するからである。主人公が求婚を拒絶するとき、いわば比喩的に、求婚者が体現する民族、国家、階級、政治信条、社会体制などが拒絶されることになる。いかなる理念、信条、体制が拒絶されることになるのかということは、作品のテーマ、作品に潜む政治的メッセージと関係してくる。ロマン主義時代の小説家、特に女性作家は、小説という媒介を自己の抱く政治的・宗教的・社会的信条を発信、表明する場として利用してきたのである。

本論では、ロマン主義時代の小説に頻出する「求婚を拒絶する女たち」のモチーフを持つ作品群に潜む政治的、社会的意図を探りつつ、このモチーフがエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の『北と南』(*North and South*, 1855) のマーガレット・ヘイル (Margaret Hale) の求婚拒絶の場面に、いかに継承されているのかを検証してみたい。

1 嬉々として承諾する女—エヴェリーナ・アンヴィル

最初に、ロマン主義時代の小説群に拒絶する女たちが登場するきっかけを作ったフランシス・バーニー (Frances Burney, 1752-1840) の風俗小説・教養小説『エヴェリーナ、または若い女性が世の中に出る物語』(Evelina, or: The History of a Young Lady's Entrance into the World, 1778、以下『エヴェリーナ』と略記) を見てみたい。求婚を拒絶する女性を主人公に据えた小説は、『エヴェリーナ』に対する反発、反論として書かれたものが多いからである。

バーニーは、時の国王ジョージ三世 (George III, 1738-1820) の后シャーロット王妃 (Queen Charlotte Sophia, 1744-1818) の女官として5年間仕え、父親のバーニー博士 (Dr. Charles Burney, 1726-1814) 譲りのトーリー党支持者である。当時の野党ホイッグ党が仕掛けた初代インド総督ウォレン・ヘースティングズ (Warren Hastings, 1732-1818) の弾劾裁判 (1788-95) においても、王妃の命を受けて裁判を傍聴し、裁判の様子を日記に克明に記した。さらには、トーリー党支持者の立場で、ヘースティングズと東インド会社を暗に擁護した風俗喜劇『忙しい一日——あるいは、インドからの到来者』(A Busy Day; or, An Arrival from India, 1800) を執筆し、ヘースティングズの名誉挽回をはかった。

『エヴェリーナ』は、主人公エヴェリーナ・アンヴィル (Evelina Anville) が育ての親のヴィラーズ牧師 (Rev. Villars) に宛てた書簡という体裁を取る。「若い女性が世の中に出る物語」という副題が示すように、地方から出てきた若くて無邪気で純真なエヴェリーナがロンドンの社交界で、世間のしきたりや社交上の慣習、作法に疎いために様々な困難に遭遇し、失敗や挫折を重ねながら精神的に成長し、最後には眉目秀麗で非の打ち所のない名門貴族オーヴィル卿 (Lord Orville) から求婚され、嬉々として承諾するという物語である。

オーヴィル卿は、初めてエヴェリーナに会ったとき、彼女の印象を「哀れで弱々しいお嬢さん」(E 28)² と知人に語る。この言葉に、彼女はひどく傷つくが、それでも彼を密かに慕うようになる。紆余曲折を経て最後に、オーヴィル卿がエヴェリーナに求婚すると、彼女はからかわれていると誤解する。「あなた様は私を馬鹿にするような残酷なお方ではございませんわよね」(E 290) と言う。すると、オーヴィル卿は「馬鹿にする、とおっしゃるのですか。いや、あなたを敬っております！誰よりも僕はあなたを尊敬し、敬服しております！……あなたは、女性の中

でもっとも優しく、もっとも完璧です。そしてあなたは僕にとって筆舌に尽くしがたいほど愛しい存在なのです」(E 290)と言いつつ。エヴェリーナは嬉しさのあまり気を失わんばかりになる。オーヴィル卿に最大級の褒め言葉でもって求婚されたエヴェリーナは、「オーヴィル卿に愛され、彼の気高い心によって光栄にも伴侶に選ばれるという、この私の幸せはあまりにも大きなものでしたので、とても耐えられませんでした。私は泣きました。私を圧倒するような激しい喜びで号泣しました」(E 292)とヴィラーズ牧師に書き送る。しかし、過度に謙虚なエヴェリーナは、熟慮した結果、身分違いを理由に身を引こうとする。すると、オーヴィル卿は、「僕の心はあなたのものです。そして、あなたに永遠の愛を誓います！」(E 305)と叫ぶ。かくして、エヴェリーナはオーヴィル卿の求婚を感謝の念でいっぱいになり、涙ながらに受け入れる。このエヴェリーナの姿は、当時の因習的な女性観を展開する作法書 (conduct book) で推奨されている女性像そのものである。一例を挙げれば、グレゴリー博士 (Dr. John Gregory, 1724-73) は、作法書『父からの娘たちへの遺贈』(*A Father's Legacy to His Daughters*, 1774) において、男性に依存し、無知で、内気で、受動的で、謙遜で、慎ましやかなことが女性のもっとも望ましい属性であると主張しているのである (Gregory 37, 39)。ちなみに、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) は、『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) において、グレゴリー博士の作法書は女性に虚偽的、作為的であれと勧めているとして、手厳しく批判している (Wollstonecraft 199-200)。

バーニーは、エヴェリーナに、当時の家父長制社会、貴族階級を体現する完璧な男性オーヴィル卿の求婚を恭しく受け入れさせることによって、いかなる政治的なメッセージを発しているのか。少なくとも『ヴェリーナ』執筆時点では、バーニーが、階級制度、社会における因習的な女性の役割を尊重し、グレゴリー博士の望ましい女性像を高く評価していることは明らかである。『ヴェリーナ』に潜む政治的メッセージは、当時の家父長制社会、階級制度、政治体制を尊重し、できるだけ現体制維持することに努力すべきであるというものであろう。「執筆時点では」と限定したのは、後にバーニーの考えは変化するからである³。

貴族階級、家父長制社会、女性の置かれている状況などに些かの疑問も抱かず、素直に受け入れ、過度に謙遜で内気で受動的で男性に依存するエヴェリーナの

姿に、愚かしさ、ばかばかしさ、滑稽さ、不満、反発、反感を感じる小説家たちが出てくる。かくして、毅然として求婚を拒絶する女が小説に登場する。

2 拒絶する女—マライア・フルアート

ベイジは、製紙業を営んでいたが、ダービー哲学協会 (Derby Philosophical Society) やバーミンガムのルーナー協会 (Lunar Society) の会員と親交を深め、50歳を過ぎてから政治的メッセージを忍ばせた小説を匿名で書き始める。ベイジは、非英国国教徒でホイッグ党支持者であり、晩年には急進主義者のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) などとも親しく交際している。

急進主義小説『ハームスプロング』の主人公ハームスプロング (Hermesprung) は、アメリカ生まれで素性は定かではないが (後に判明)、虚飾にとらわれない率直な青年。トマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) の『人間の権利』 (*The Rights of Man*, 1791-92) を愛読し、階級制度に反対し、困窮している人々に援助の手を差し伸べ、ウルストンクラフトの女子教育論を全面的に支持する。物語はハームスプロングと父親に圧制的に支配されている娘キャロライン (Caroline Capinet) の、一見すると身分違いの恋愛を中心に展開する。

『ハームスプロング』において用いられている文学的戦略は、文学的戯れと体制批判の共存である。『ハームスプロング』は先行する小説などと軽快に戯れながら、その戯れの背後に様々な急進主義的メッセージを潜ませるとい手法、戦略をとる。つまり、様々な文学的常套手段を風刺し揶揄し、貴族、国教会牧師、弁護士などの体制側に属する人々の卑俗性、腐敗堕落ぶりを機知と上質のユーモアや笑いに包んで暴露し、社会慣習、体制を皮肉たっぷりに批判するのである。最後には、攻撃していたはずの文学的常套手段をそのまま利用して、ハッピー・エンドに纏め上げるという、急進主義小説としては意表をつく結末をつける (鈴木, 2007, 127-28)。

キャロラインの親友マライアは、急進主義的信条の持ち主で、きわめて理知的で機知に富んでいる。ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』に言及しながら、社会における女性の役割、女子教育などについて熱く語る (H 213-17)。マライアは、作法書において望ましいとされている女性のまきに対極に位置すると言えよう。先に挙げた作法書『父からの娘達への遺贈』において、グレゴリー博士

は、女性に知性は不要と断言し、女性の才気はしばしば「自己陶酔的で、自制心を失いがちで……もっとも危険な才能」(Gregory 41-42)であると批判しているからである。

マライアは、キャロラインの父で60歳のグロンデイル卿 (Lord Grondale) に求婚され、突然キスを求められる。「キスですって！何ということでしょう。……あなたの飛びかかりようからして、てつきり服でもはぎ取って私を陵辱したいのかと思いましたわ」(H 110-11)と機知に飛んだ返答する。さすがのグロンデイル卿も笑いだし、誘惑の手を一時緩める。しかし、不遜で傲慢で好色なグロンデイル卿は、自分の社会的地位をもってすれば、マライアはいずれ求婚に応じるだろうと尊大にも考え、執拗に求婚を続ける。「フルアートさん、もしわしの地位、貴族の肩書き、人格、そして財産をあなたの足もとに投げ出すと申し出たなら、あなたは求婚を真剣に考慮する価値ありとお思いになるでしょうか」(H 185)。彼女は取り澄まして「あら、グロンデイル卿、もちろん、そういったものは非常に重要なものですわ。そのいくつかを踏みつぶしたくなりますもの。それに、実際、グロンデイル卿、私があなたの性急なお申し込みをお受けしたら、あなたはあまりにも多くの物を失うことになりますわよ」(H 185)と、社会的地位、貴族の肩書き、財産などは踏みつぶしても当然の取るに足らない物、と指摘する。さらに、彼の結婚の申し出を承諾すれば彼が失う物は多々ある、とユーモアたっぷりに脅かし、求婚を拒絶する。グロンデイル卿はそれでも納得せず「貴女はグロンデイル令夫人にならなければいけませんぞ」(H 186)と重ねて言うと、「私にはその必要性は感じられませんわ」とマライア。するとグロンデイル卿は「わしは必要性を感じるのだ」と返答。それに対してマライアは「じっくりと考える必要がありますわね。私の脳が耐えられないほど考える必要がありますわ。ですからお気をつけ遊ばせ、グロンデイル卿。……それに、ストーン夫人はなんとおっしゃるかしら」(H 187)と、グロンデイル卿の屋敷の家政婦長にして彼の長年の愛人でもあるストーン夫人 (Mrs Stone) に言及して、グロンデイル卿の欺瞞、虚偽を指摘し、求婚を断固として撥ね付ける。

小説の最後では、マライアは、「まだ自分自身に夫を購入する気にはなれないわ」(H338)と茶目つけたつぷりに言い放ち、「小さな家を構えて」(H338)一人で快適に暮す生き方を選択する。このマライアの生き方は、女性は結婚してこそ幸せ

なのだという、当時の家父長制社会の暗黙の思い込み、因習的な女性観に対する痛烈な批判となっている。澆刺として機知に富んだ自立した女性マライアが拒絶したものは、グロンデル卿が体現する貴族階級、家父長制社会である。作品に潜む政治的な意図は、貴族階級の卑俗さ、腐敗墮落を告発することであり、家父長制社会の因習的な女性観を露わにすることであろう。貴族で、年長者で、家父長制社会の権化のような男性の求婚を中産階級の若き女性が鮮やかに退けるこのエピソードは、当時の急進主義小説の中でも、ひとときわ光彩を放っていると言えよう。

3 拒絶する女—イーダ・ロセメリ

オーエンソンは、当時最も成功した女性の職業作家の一人である。政治的には筋金いりのホイッグ党支持者であり、旧教徒解放を支持し、アイルランドの独立運動を積極的に支援し、イタリアやギリシアの独立運動にも共感を抱いていた。現実においても小説においても、帝国と植民地の力関係を執拗に追求した作家である。

国民小説『アテネのイーダ』は全4巻からなり、描かれている時代は1780年から88年までのおよそ8年間。ギリシア暴動(1770)、露土戦争(1768-74, 1787-92)を歴史的な背景としてもつ。この作品は、ギリシア人の父親とイギリス人の母親を持つ、知的で感受性豊かな女性イーダと彼女に魅了される三人の男性の関係を巡って展開していく。三人の男性とは、傲慢で世慣れた放蕩者のイギリス人貴族B卿(Lord B)、ギリシア人で元奴隷の革命の闘士オスマン(Osmyn)、そしてオスマン帝国の好色で残虐なアヘメト帝国軍司令官(Ahemet)である。

B卿がイーダに求婚するのは、第1巻と第4巻である。第1巻の舞台はアテネ、時代は1788年頃。イギリス人旅行者のB卿が、イスラムの二大祭りの一つ、大祭(Greater Bairam)の初日にアテネを訪れるところから物語は始まる。B卿の目から見た、オスマン帝国の植民地支配下にあるギリシアの姿が活写される。B卿は、異国的な魅力に溢れる美貌のイーダを垣間見て虜になり、大英帝国の貴族らしい傲慢さで、彼女を愛人にしようとする。B卿は、イーダに初めて愛を告白する際に、「[君は]僕の習慣を覆し、僕の利害関係には危険であり、僕の義務に反しているのだ」(I1:183)と、いかにも恩着せがましく弁解しながら、愛人になっ

てくれと頼む。イーダは、B 卿の愛の告白に対して、「ああ！だめです……永遠にあなたの友人であります。アテネのイーダはあなたの妻になることは決してありません」(I 1:193) と拒絶する。

第 4 巻の舞台はロンドン。イーダはイギリスに亡命し、B 卿と再会する。B 卿はイーダに正妻になってほしいと求婚する (I 4: 244)。それに対してイーダは、「私はあなたのものになることは決してありません。……他の方を愛しているからなのでございます。愛情が報われるという希望はないのですが、私はその方を愛しております」(I 4: 247) と言って、求婚を断る。「その方」とは、ギリシア人のオスミンのことである。B 卿はオスミンに対するイーダの思いを叶えるために、義侠心を發揮して二人の仲を取り持つ。イーダとオスミンは結婚し、ロシアの地で祖国ギリシアの独立運動に打ち込む、という所で物語は終わる。

ギリシア文明を体現するイーダは、大英帝国を体現する B 卿から、一度目は愛人として二度目は正妻として求められる。オーエンソンが、イーダに B 卿を二度にわたって拒絶させ、ギリシア人オスミンの求婚を受け入れさせたのは、政治的な意図があつてのことである。当時、ギリシアは独立達成のために英国を含めた他国の援助を当てにしていた。オーエンソンはそのことを懸念し、ギリシアがオスマン帝国から独立するためには、英国などの援助に頼らず当事者であるギリシア人自身が立ち上がり、自力で独立運動を行わなければ達成は難しい、ということを警告しているのである。さらには、ギリシア（オスマン帝国の植民地支配下にある）をアイルランド（大英帝国の植民地支配下にある）に、オスマン帝国をイギリスに、ロシア（ギリシアを援助）をフランス（アイルランドを援助）に置き換えるとき、その意図はより鮮明になる。オーエンソンは、『アテネのイーダ』において、オスマン帝国によるギリシアの植民地支配の非道さを描きながら、間接的にアイルランドにおけるイギリスの植民地政策の不正義、不当さ、非道さを仄めかし、アイルランドの独立達成を強く希求しているのである。

4 拒絶する女—エリザベス・ベネット

『高慢と偏見』の美しく知的で澁刺とした主人公エリザベスは、「反エヴェリーナ」、「反セシリア」として設定されている (Moler 97-98; Butler 198-99)。エリザベスは、繊細で内気、謙虚で控えめなエヴェリーナやセシリア (Cecilia) とはまさ

に正反対の行動を取り、バーニーの女主人公達のパロディ的側面を持つ。エリザベスは既成概念にとらわれず、「元氣よく走ったり」(P 53)、ペチコートに泥だらけにしながらぬかる道を一人歩いて姉の見舞いに出かけたり、不遜な態度を取るダーシー氏 (Mr Darcy) に対して機知に富んだ応酬をして、からかったり、急進主義的発言をおこなったりする。このエリザベスの姿は、まさしく『ハームスプロング』のマライアを想起させる⁴ (Knox-Shaw 100)。

『高慢と偏見』のエリザベスがもっとも輝いて見えるのは、マライアと同様、拒絶の場面であろう。エリザベスは、最初は父親ベネット氏 (Mr Bennet) の推定相続人である英国国教会の牧師コリンズ氏 (Mr Collins)、次は大地主のダーシー氏、そして最後に貴族階級出身のレディ・キャサリン・ド・バーグ (Lady Catherine de Burgh) の要求を拒絶する。コリンズ氏は女性に保守的な教訓を与えるジェイムズ・フォードイス (James Fordyce, 1720-96) の『若き女性のための説教集』(Sermons to Young Women, 1765) を愛読し、きわめて因習的な女性観を抱いており、女性は求婚されたら喜んで飛びつくだらうと思っている。『若き女性のための説教集』は、グレゴリー博士の『娘達への父による贈り物』と同様、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』において酷評されている (Wollstonecraft 191-96)。コリンズ氏は、『エヴェリーナ』に登場するスミス氏 (Mr Smith)、そして『ハームスプロング』のサー・フィリップ・チェストラム (Sir Philip Chestrum) など「自惚れた青年の求婚」の系譜に連なる人物である (Moler 96; Butler 83)。

エリザベスはコリンズ氏に求婚され、「お断りする以外いたしようもございません」(P 107) ときっぱりと断るが、自信満々の思い上がったコリンズ氏は本気にしない。そこでエリザベスは再び「私は本気で断りしているのでございます」(P 107) と言う。すると、コリンズ氏は「求婚を最初の申し込みでは拒絶するというのがあなたがた女性の習慣であると存じております……優雅な女性の常套手段にしたがって気をもたせて愛情を募らせんとするものにほかならぬと考えたいのであります」(P 108-09) と言いつのる。かくして、エリザベスは「お受けすることはまったく不可能なのです……私を優雅な女などとは思わずに、心から真実を申し上げている理性あるものとお考えください」(P 109) と断固として拒絶する。この拒絶の言葉は、「女性の優雅さを誉めそやしたり……する代わりに、女性を理性的存在として」(Wollstonecraft 81) 考えるべきである、というウルストンクラ

フトの『女性の権利の擁護』を想起させる。ここに、当時の男性に都合の良い因習的な女性観に対するエリザベスの憤り、不満が示唆されている。

ダーシー氏の最初の求婚は、先に見たオーヴィル卿のエヴェリーナへの仰々しい求婚のパロディになっている (Moler 82)。ダーシー氏は、両家の家柄の相違、ベネット家とその親戚の階級の低さを赤裸々に指摘し、「自分の意志に逆らい、理性に逆らい、自分の人柄にさえも逆らって」(P 192)、エリザベスを愛すると言う。彼の言葉は、『アテネのイーダ』のB卿が愛の告白の冒頭に用いた言葉と酷似している。エリザベスは、エヴェリーナとは違って、ダーシー氏の求婚を恭しく受け入れたりはしない。「お知り合いの最初から……あなたの態度は傲慢で自惚れの強い、他人の感情を傷つけて平気な方という印象をはっきりときざみつけ、そのうえ続いて起こった事件ですっかりあなたを嫌いになってしまいました……絶対結婚する気にならない方だと思いました」(P 193) と、彼の横柄さ、過度の自尊心、高慢さを指摘し、彼の求婚をきっぱりと拒絶する。

家名に過度の誇りを抱き、傲岸で頑迷、偏狭なレディ・キャサリンは、甥のダーシー氏が「家柄の悪い、有力な親戚もない、財産もない若い成り上がり娘」(P 356) エリザベスと結婚することは、ダーシー家の品位を貶めることであり、「名誉、礼儀、分別、いや利害関係がこの結婚を禁じているのですよ」(P 356) と述べ、エリザベスに甥との結婚を思い留まるようにと要求する。すると、エリザベスは、「彼は紳士ですが、私も紳士の娘です。その点平等です」、「私の事件に干渉なさいます権利はまったくおありになりません。この問題についてこれ以上悩まさないでいただきたいと存じます」(P 356)、「義務も名誉も感謝もこの場合何の関係もないことごとくごさいます。私がダーシーさまと結婚したからといって何一つ損なわれる道義はごさいます」(P 356-58) と、彼女の要求を毅然として退ける。

エリザベスは、保守主義の論客エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) の鍵語である義務、名誉、感謝、道義を決然と否定し、急進主義者ゴドウィンの用語である平等、権利、干渉を用いて反論する。結局、エリザベスは、中産階級を体現する英国国教会の牧師そして貴族階級を体現する大地主や令夫人の求婚・要求を毅然として拒絶し、彼らの傲慢さ、蒙昧さ、頑迷さ、偏狭さ、俗物性を暴き出す。かくして、エリザベスの急進性は拒絶の場面でひとときわ際立つのである。

5 拒絶する女—マーガレット・ヘイル

『北と南』に描かれている求婚拒絶の構図は、基本的にはオーエンソンの『アテネのイーダ』とオースティンの『高慢の偏見』のそれを継承している⁵。マーガレットが弁護士ヘンリー・レノックス (Henry Lennox) に求婚されるのは、北の産業都市ミルトンに引っ越そうとしている時である。マーガレットは、イーダがB卿を断った時のように「友人」という言葉を連発して、「びっくりいたしました。……私はあなたのことをいつもお友達とっておりました。お願いですわ、あなたのことをずっとお友達だと思っていきたいのです」(N 29)、と言って彼の求婚を断る。レノックスは、断られても「いずれ僕のことを恋人として考えてほしいのだが」(N 29)と、『高慢と偏見』のコリンズ氏のように、未練がましく懇願する。マーガレットは、1、2分沈黙した後、次のように答える。「私はあなたのことをお友達としか考えたことはありません。私はあなたのことをお友達と思いたいんです。あなたのことをどうしても友人以外のものとは考えられません」(N 29)。マーガレットは、「ヘンリーの求婚を断ったときの痛みにかすかな軽蔑が混じり合う」(N 30)のを感じ、「彼女の美しい唇がかすかに軽蔑の念でゆがむ」(N 30)。一方、レノックスの方は『高慢と偏見』のコリンズ牧師と同様、彼女の拒絶の言葉を額面通りには受け取らない。それどころか「僕は彼女が信じているほど彼女に対して無関心ではない。希望を失わないようにしましょう」(N 30)と決意する。レノックスはコリンズ師同様、まさしく「自惚れた求婚者」の系譜に連なる人物と言えよう。マーガレットがレノックスに多少の軽蔑の念を抱くのは、彼があまりにも自惚れ、自己満足しており、現実認識が甘いからであろう。レノックスはマーガレットより15歳ほど年長で、中産階級出身の弁護士。おそらく、スコットランド国教会の長老派に属しており、いわゆる体制側の人間である。マーガレットの求婚の拒絶は、レノックスが体現する豊かで安定した中産階級の生活、価値観に対する彼女の拒絶を意味する。

ジョン・ソートン (John Thornton) は、マーガレットに「男性が女性をかつてこれほど愛したことはないほど愛している人」(N 195)と、情熱的に呼びかけ、求婚する。「あなたの話し方は衝撃的です。失礼ですわ。失礼だというのが、私が最初に感じたことだとしても仕方ありません。……あなたの態度は不愉快です」(N 195)と、彼女は求婚を断る。実は、彼女はこの時点で、すでに無意識の

うちにソートンに惹き付けられているのだが、「衝撃的」、「礼を失する」、「不愉快」という言葉を用いて彼の求婚を退け、続けて紳士であれば暴動の際に助けてもらったことを愛情の表れなどと誤解はしないはず、と指摘する。すると、ソートンはペインの『人間の権利』を想起させる「人間」(man)と「権利」(right)という言葉を用いて反撃する。「そのようにして助けられた紳士はほっとしてありがたいと言うことを禁じられているのですね……僕は人間だ。自分の気持ちを表現する権利があります」(N 195)。自分は、中産階級のしがらみや作法にがんじがらめになっている「紳士」ではない、「人間だ」と主張し、人間には自分の気持ちを率直に表現する権利がある、と言い放つ。二人はかつてソートン家で開催された晩餐会で紳士の概念を巡って議論しており、ソートンはそのことを念頭に置いて発言している。『高慢と偏見』のエリザベスがコリンズ氏の執拗な求婚を拒絶する際に、ウルストンクラフトを想起させる言葉を用いて家父長制社会を批判したように、『北と南』においてはソートンが、ペインの『人間の権利』を思い起こさせる用語を用いて、マーガレットの抱く紳士概念、階級的偏見、ひいては英国の階級制度を批判する。ソートンの反駁は、図らずも彼の急進性を浮き彫りにする。

ソートンの二回目の求婚は、レノックスに助けられる。彼は、マーガレットがソートンに対する熱い思いを胸に秘めていることに気づき、二人だけで語り合える場を設けてやる。マーガレットとソートンは互いの気持ちを確かめ合い、かくして、ソートンの二回目の求婚は受け入れられる。レノックスの恋の仲立ち者は、『アテネのイーダ』のB卿のそれを想起させる。

マーガレットとソートンの結婚は、国民小説に頻出する民族・階級・文化・宗教の異なる者同士の結婚でもある(鈴木 2010, 348, 352-53)。マーガレットは、イングランド南部出身、英国国教徒、中産階級に属する。ソートンは、北部出身、非英国国教徒、出自は労働者階級である。マーガレットは、中産階級を体現するレノックスを拒絶し、非英国国教徒、共和主義者、産業資本家のソートンとの結婚を承諾する。この結婚に、作品に潜む政治的なメッセージが示唆されている。ギヤスケルは、進歩や社会変化に価値を置くホイッグ的歴史観を抱き、ユニテリアンとして英国国教会の持つ政治的・宗教的特権に対して批判的だった。ギヤスケルは、マーガレットに、政治的、階級的、宗教的にほとんど同質のレノッ

クスではなく、ことごとく異なるソートンンを伴侶として選択させることにより、真に望ましい英国社会は、政治的、宗教的、民族的に多様な価値が共存する社会であることを示そうとした。ギヤスケルは、「求婚を拒絶する女」のモチーフを、彼女の政治的・宗教的立場に合うように修正を施し、『北と南』の構成やプロット展開に巧みに利用したと言えよう。

注

本稿は、日本ギヤスケル協会第31回大会（2019年10月5日、於実践女子大学渋谷キャンパス）における講演「拒絶する女たち——マライア・フルアート、イーダ・ロセメリ、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」に加筆修正を施したものである。

- 1 Idaの発音は、英語読みであればアイダであるが、ギリシア人なので「イーダ」、または「イダ」であろうと推測される。本論では「イーダ」と表記することにする。
- 2 以下、『エヴェリーナ』はE、『アテネのイーダ』はI、『ハームスブロング』はH、『高慢と偏見』はP、『北と南』はN、『セシリア』はCと略記し、出典は括弧内に算用数字で頁数を示す。
- 3 バーニーの最後の作品『さまよえる女、または女性の困難』(*The Wanderer; or, Female Difficulties*, 1814)には、幾つもの職業を転々としながら真摯に生き抜いていくジュリエット・グランヴィル (Juliet Granville) やウルストンクラフトの政治思想やフランス革命に共感し女性の権利を声高に叫ぶエリナー・ジョドレル (Elinor Joddrel) が登場する。バーニーの家父長制社会に対する信頼の揺らぎが窺われる。
- 4 バーニーの『セシリア』に「高慢と偏見」という言葉が3回用いられている (C 930) ことはよく知られているが、『ハームスブロング』にも「高慢と偏見」という言葉が何度か繰り返し使用されている (H 170, 173-74)。『ハームスブロング』と『高慢と偏見』の影響関係については、拙論『『ハームスブロング』から学んだもの』、参照。
- 5 ギヤスケルが、オースティン、バーニー、そしてサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の作品を読んでいたことは確かである (Rubenius 317; Uglow17) が、ページとオーエンソンの作品を読んでいたことを示す書簡の記載などは見当たらない。ともあれ、ページとオーエンソンの作品は、スコットやオースティンの小説に強い影響

を与えており、ギヤスケルがたとえベイジとオーエンソンの作品を読んでいなくても、スコットやオースティンの作品を通じて間接的に影響を受けた可能性はある。

引用文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. *The Oxford Illustrated Jane Austen*. Ed. R.W. Chapman. 1813. Oxford: Oxford UP, 1967.
- Bage, Robert. *Hermesprung; or, Man as He Is Not. A Novel*. Ed. Pamela Perkins. 1796. Peterborough: Broadview P, 2002.
- Burney, Frances. *Evelina, or, The History of a Young Lady's Entrance into the World*. Ed. Stewart J. Cooke. 1778. New York: W. W. Norton, 1998.
- . *Cecilia, or Memoirs of an Heiress*. Ed. Peter Sabor and Margaret Anne Doody. 1782. Oxford and New York: Oxford UP, 1988.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Oxford UP, 1975.
- Campbell, Mary. *Lady Morgan: The Life and Times of Sydney Owenson*. London: Pandora P, 1988.
- Doody, Margaret Anne. *Frances Burney: The Life in the Works*. New Brunswick: Rutgers UP, 1988.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South. The Works of Elizabeth Gaskell*. Ed. Joanne Shattock, et al. 10 vols. 1855. London: Pickering & Chatto, 2005-06.
- Gregory, John. *A Father's Legacy to His Daughters*, 1774. London, 1795.
- Knox-Shaw, Peter. *Jane Austen and the Enlightenment*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Moler, Kenneth. *Jane Austen's Art of Allusion*. Lincoln: U of Nebraska P, 1977.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works. In Essays and Studies on English Language and Literature*, V. Ed. S. B. Liljegren. The English Institute in the U of Uppsala, 1950.
- Owenson, Sydney. *Woman: or, Ida of Athens*. 4 vols. London, 1809.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. Ed. Miriam Kramnick. 1792. Harmondsworth: Penguin, 1975.
- 鈴木美津子 「『ハームスブロング』から学んだもの—文学的戯れと体制批判」, 内田能嗣・塩谷清人編著『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』, 世界思想社, 2007. 125-38.

——『『北と南』とロマン主義時代の歴史小説』、日本ギヤスケル協会編『エリザベス・ギヤスケルと英国文学の伝統』、大阪教育図書、2010. 347-57.

(東北大学名誉教授)

The Women Who Reject a Marriage Proposal: Maria Fluart, Ida Rosemeli, Elizabeth Bennet, and Margaret Hale

Mitsuko SUZUKI

A woman character who rejects resolutely a marriage proposal by a man of position, often appears in the late eighteenth- and the early nineteenth-centuries novels: Maria Fluart in Robert Bage's *Hermisprong, or, Man as He Is Not* (1796), Ida Rosemeli in Sydney Owenson's *Woman; or, Ida of Athens* (1809), Elizabeth Bennet in Jane Austen's *Pride and Prejudice* (1813) and so on. The proposal scene is particularly interesting and significant because the private sphere where a woman protagonist is asked for her hand by her suitor suddenly transforms itself into the public one where, in Marilyn Butler's words, 'the war of ideas' about race, religion, politics and empire is fought. When she turns down his marriage proposal, it implies she metaphorically refuses race, nations, political and social systems, and religious belief he embodies. Women novelists in the Romantic period express their political, religious, and social ideas through the medium of novels, which provide the site of 'the war of ideas' for the novelists at that time.

The purposes of this essay are twofold. First, I argue what intention lies concealed behind the above-mentioned novels with a motif of 'the woman who rejects a marriage proposal'. Second, I investigate how the scene where Margaret Hale refuses Henry Lennox's and John Thornton's marriage proposal dauntlessly in *North and South* (1855) inherits and follows the motif from the novels in the Romantic age, modifying it to serve Elizabeth Gaskell's own political purpose.

エリザベス・ギヤスケルの障害者表象

星 志乃

序

エリザベス・ギヤスケルの作品に関する先行研究では、社会問題小説における労働者の表象、そうした社会的弱者との関わりを通じたヒロインの成長や家父長制社会での自立を取り上げた批評が多くなされている。また、ギヤスケルの作品には多くの障害者が登場しており、ヒロインに焦点を当てた障害者の看護行為に関してはこれまでも考察されてきたが、¹ 障害者自身の表象に焦点を当てた研究は未だかつて見られない。実際、文化や時代の違いを超えて障害者が様々な文学作品に描かれているにもかかわらず、文学・文化研究がそれらを研究の対象としてこなかったのを多くの研究者たちが指摘し始めており (Hall 31)、障害者表象に関する研究の欠如はギヤスケル研究に限ったことではない。しかしながら、執筆活動と同時に社会的弱者の救済に積極的に参加していたギヤスケルの文学を研究するうえで、労働階級と同様に社会的弱者であった障害者に焦点を当てて彼女の作品を考察することは、作家に対する理解を深めるために必要だと思われる。

1975年に英国で The Union of the Physically Impaired Against Segregation (UPIAS) がインペアメント (impairment、身体・精神面における機能不全) とディスアビリティ (disability、社会における能力不全) を分けて定義したことは、ディスアビリティスタディーズ (障害学) の発展に大きく影響している。² UPIAS は、インペアメントを持つ人々の能力の発揮を妨げている (disable) のは社会であると提言し (Burker and Murry xiii)、身体面と社会面を分離して捉え、インペアメントではなくディスアビリティが問題だと強調した (長瀬 15)。この二つの言葉の定義は、その後ディスアビリティスタディーズの研究や活動の基礎として用いられ続けている。本稿では、インペアメントを持つ人のことを「障害者」と表記する。「害」の表記に関しては、近年「障がい」とすることも目立ってきたが、ディスアビリティスタディーズのほとんどの文献で漢字が使用されているため、本稿でも漢字表記に統一する。また、身体・精神面における機能不全と、社会における能力不全とを意識的に区別したい第1節内では、「インペアメント」と「ディ

スアビリティ」の表記を使用する。さらに、インペアメントを持たない人のことは、長谷川潮が『児童文学のなかの障害者』（2005）で使用している「非障害者」の表現を借用する。³

本稿の目的は、これまでほとんど注目されてこなかったギヤスケルの作品における障害者の表象に着目し、彼らがどのように描かれてきたか、また彼らが作品においてどのような役割を担っているかを明らかにすることである。分析の対象は、「リビー・マーシュの三つの祭日」（‘Libbie Marsh’s Three Eras’, 1847）、『メアリ・バートン』（*Mary Barton*, 1848）、「マーサ・プレストン」（‘Martha Preston’, 1850）、「ペン・モーファの泉」（‘The Well of Pen-Morfa’, 1850）、『ルース』（*Ruth*, 1853）、「一時代前の物語」（‘Half a Life-Time Ago’, 1855）である。⁴ これら6作品を対象とするのは、ギヤスケルの作品の中でも障害者とヒロインの関わり合いが作品全体を通じて描かれている、もしくはヒロインが障害を持つようになるからである。まず第1節と第2節では「リビー・マーシュの三つの祭日」、「ペン・モーファの泉」、「マーサ・プレストン」、「一時代前の物語」の短編4作と『ルース』を中心に取り上げ、障害者の表象をもとに彼らに対する偏見や先入観を明らかにする。第3節では非障害者を支える障害者である『ルース』のベンスン氏と、『メアリ・バートン』のマーガレット・ジェニンズについて考察する。ベンスン氏は障害者でありながら非障害者のルースを救い、社会復帰するのを支える役割を担っている。マーガレットも、盲目という障害を持ちながら力強く生きており、非障害者に救いの手を差し伸べる力を持った障害者として描かれているように見えてならない。ベンスン氏とマーガレットの作中での役割や表象を分析することで、当時の他の作家と異なったギヤスケルの障害者表象が明らかになると考える。

1 従来のディスアビリティとギヤスケルが与えた救い

ディケンズの「クリスマス・キャロル」（*A Christmas Carol*, 1843）に登場するタイニー・ティムのように、19世紀英国の小説では、障害者が非障害者より劣る存在であることを想起させる描写が多い。こうした障害者表象は、UPIASの「社会がインペアメントに対して不配慮であるがためにディスアビリティが生じている」という主張と一致するものである。ディスアビリティスタディーズが学術分野としての認識を得始めたのは1960年代である（Goodley 1）。障害の医学的モデ

ルを否定して新たな社会的モデルを理論化することが、1960年代後半から1980年代にかけての障害者の権利に関する政治的・社会的運動の基盤となり、1990年代の英国・米国等の障害者に関する法律制定に影響を与えた (Hall 19)。ディスアビリティスタディーズが文学・文化研究に導入されたのは1980年代後半からで、それまでは主に政治的・社会学的視点から注目される学術分野であった (Hall 30)。その先駆けとなったのは、1995年のLennard J. Davisによる *Enforcing Normalcy: Disability, Deafness, and the Body* の出版である。Davisは「障害者」と呼ばれる人々を生み出す正常 (normalcy) の概念を指摘し、それが肯定的な特徴として様々なメディアを通じて表象され、社会生活のスタンダードとして強要されていることを問題視した。その後、文学・文化研究におけるディスアビリティスタディーズに関する書籍が年々増えてきている。しかし、これまでの研究は1990年代以降の文学作品や米文学を対象とするものが多く、19世紀英国文学の障害者表象に注目した研究はあまり進んでいない。⁵ 一方で、ヴィクトリア朝は急速に産業化・機械化が進んだことで障害の種類も多様化し、多くの障害は後天的なものだったと言われている (Holmes; “Embodying Affliction” 62)。実際、今回研究の対象としている作品でも、描かれている障害者全員が後天的に障害を持つようになっている。また、障害者の権利が認められるようになったのは20世紀終盤で、⁶ ギヤスケルらの作品に描かれているように、ヴィクトリア朝の障害者は差別の対象となる存在であった。障害者の権利が認められる以前の文学における障害者表象に注目することは、文学研究のみならず、当時の社会における障害者の立場や差別を明らかにすることにも貢献できると考える。そこでまず、ギヤスケルの作品では身体・精神的機能不全のインペアメントと、社会的能力不全のディスアビリティがどのように描かれているかを確認したい。

第一に、身体的・知的に重いインペアメントを持つ人は勤労収入を得ることが難しいため、経済的に自立できない。彼らは他者の経済力に依存して生きていくしかなく、そのために哀れで忌み嫌われるべき存在として認識されていた (Holmes; *Fictions of Affliction* 102)。障害者の経済的依存性は、「リビー・マーシュの三つの祭日」にも反映されている。⁷ ホール家では、フランクが寝たきりで働けないため母マーガレットの収入で生計を立てている。家父長制社会のヴィクトリア朝において、本来男性として一家の経済力を持つべき立場にあるフランクは、家庭を

支えられず、ひいては労働者としての社会的責任を果たせない存在となっている。ヒロインで孤児のエリザベス・マーシュ（リビー）はディクソン家に下宿しており、向かいのホール家のフランクが下半身不随で友達がいないことを知る。リビーが彼にカナリヤを贈ったことをきっかけにリビーとホール家の親交が始まり、聖霊降臨祭の祝日には三人でダナムへ旅行することになるが、下半身不随のフランクを船まで運ぶことが「大きな難問」（I:57）と表現されている。そしてこの難問はリビーが自腹を切って馬車を雇うことで解決される。結果的にフランクのディスアビリティは、未来への希望を失っていたリビーが社会での自らの存在意義を見出す契機になっている。

第二に、インペアメントはジェンダーやセクシュアリティの観点でディスアビリティを生んでいる。「ペン・モーファの泉」のネストは、足が不自由になる以前は村一番の美人と言われるほどの美貌と思いやりの心を持った女性だった。しかし彼女が怪我をした後、農家の息子のエドワードは、彼女の足が一生不自由だと知ると「健康で有能な女の人でも大変な」（I:165）農家の重労働を、障害者がこなすのは不可能だという理由で婚約放棄を明言する。しかしその後ネストの母エレナに対し、「ネストはどんな男の奥さんにもふさわしくないってことは、ご自分の良識でお分かりだと思います」（I:166）と述べ、農家の重労働は建前の理由にすぎなかったことが明らかとなる。つまり、外から疲弊して帰宅する男性を癒す場である家庭を守るという、ヴィクトリア朝の女性の役割を担うのは、障害者には不可能だと指摘しているのである。

また、インペアメントを持つことは女性に限らず男性の結婚にも影響を与えることが他の作品から読み取れる。『ルース』でミス・ベンスンは「わたしはマスター・サースタンを置き去りにすることができません。弟は一生結婚できないでしょうから」（124）と恋人からの結婚の申し込みを断っており、インペアメントを持つことと結婚の密接な関係がうかがえる。さらにジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』（*The Mill on the Floss*, 1860）で、マギーは足の不自由な兄の友人フィリップと恋仲になるにもかかわらず、インペアメントを持たないスティーブンに惹かれてフィリップのもとを離れてしまう。これはフランク同様に、男性障害者は経済的弱者になりやすかったため、ヴィクトリア朝における男性としての役割が果たせない可能性が高かったことと関連しているのではないだろうか。

インペアメントは、障害者本人だけでなく障害者の世話をする人までも孤立させる。「マーサ・プレストン」のウィル・ホークショウは、婚約者であるマーサの弟が持つ知的障害を理由に、他の女性との結婚を選ぶ。弟の死後、一人になったマーサは自分の家族を持てなかったことを次のようにひどく悲しむ。

She was growing old alone; with a most loving nature, she had none to love as she could have done, had God permitted her to have husband and children; and sometimes in the deep midnight she cried aloud to heaven in her exceeding grief that she had never heard a child's murmuring voice call her 'Mother.' (I:126)

Martha Stoddard Holmes によると、ヴィクトリア朝では病気や身体的欠陥が遺伝することに対する医学的懸念があり、インペアメントを持つ女性は子どもを産むことを許されていなかった (Holmes; *Fictions of Affliction* 7)。Holmes は、ヴィクトリア朝のメロドラマのヒロインとディスアビリティの関係について、インペアメントを持つヒロインは、恋愛関係をどれほど発展させても、ほとんどの場合において生物学的親にはなれないとも述べている (6-7)。さらに、「マーサ・プレストン」の修正執筆である「一時代前の物語」でも、知的障害の弟の面倒を見たいヒロインのスーザンと、それを嫌がる婚約者との間で意見が合わず、二人の縁談は反故にされる。マーサと同様、スーザンは自分を愛してくれる者がいないことより「愛すべき者がこの世に誰もいないこと」(III :373)の方が辛く、弟の死後、孤独を恐れる様子が記述されている。『フロス河畔の水車場』の結末では、マギーとトムの墓参りをする際スティーブンは妻を連れているが、フィリップは一人である。障害者は家族を持つことが許されない存在だったかのようである。こうした障害者表象は、ヴィクトリア朝で障害者やその家族がいかにか卑しまれていたか、周囲からの差別の対象になっていたかを示していると考えられる。⁸

しかし忘れてはならないのは、「マーサ・プレストン」において、マーサが最終的に元婚約者の息子を養子とすることで疑似家族を形成していることである。スーザンも元婚約者の死後、彼の妻と子どもたちを自分の農場に呼び寄せ、共に生活し始める。ネストもメアリー・ウィリアムズという重い精神障害を持った少女を引き取って一緒に住み、面倒を見始める。彼女たちが、血は繋がっていないも

の家族と呼べる人、生活を共にする人を得ているのは、家族の絆や家庭の力を重要視していたギヤスケルだからこそではないだろうか。ギヤスケルの障害者表象には、他の作家には見られない救いが与えられているのである。

2 新たな障害者像の模索

文学に登場する障害者は、哀れみや同情心を掻き立てる役割を担うことが多いと言われている (Davis 9)。また、障害者は文学作品中で脇役として描かれることが多く、障害者を中心的に扱う作品は非常にまれである (Davis 9)。これは、ヴィクトリア朝において障害者が社会の周縁に位置付けられていたことをそのまま表しているとも言える。ロイス・キースは、「身体障害者が非難され、罰せられ、同情され、いずれにせよ正式な社会の一員として受け入れられなかったことは明らかである」(37) とし、物語における身体障害者の描写の役割は大きく三つに分類できると述べている。第一に「悪魔そのもののように恐ろしく邪悪な役割」、第二に「早死にするように定められた、天使のように純粋な弱者」、そして第三に「病気ではあるが死にかけているわけではなく、困難な宗教的あるいは精神的旅に出ることが必要で、最終的には癒されるという役割」である(37-38)。「リビー・マーシュの三つの祭日」にも、前述の第二の障害者の役割が忠実に反映されている。作中では、フランクが周囲の人々からの同情を集める描写が不自然なほど多い。フランクについて初めて語られる場面は、「悲哀に満ちた人々に対して憐れみの光」(I:51) が注がれていた時刻と形容され、フランクの身体描写をする前に世界を憐れみで包み込むことで、障害を持つフランクについて語りだす準備をしているようにも見える。その後も「重苦にあえぐ少年」(I:51)「かわいそうなフランキー」(I:58)「哀れなフランキー・ホール」(I:66) など、フランクに言及する際には彼の哀れさを強調する形容詞を伴うことが多い。

フランクに対する同情が最も強調されるのは、彼が母とリビーと三人でダナムへ旅行した際、日曜学校の小さな女の子からパンを分け与えられる場面である。フランクを観察していた女の子は、自分が持っていたパンの半分をフランクに投げ与えるが、自分の大胆な行動を恥ずかしく思い、姿を隠して彼の様子をうかがう。その反面、フランクは「喜びと幸せに圧倒され、ほとんど食べ物に手がつけられなかった」(I:62)。彼は小さな女の子という立場の弱い人物から憐れみをか

けられるほど無力な人物として描かれている。また、女の子はフランクのことをずっと見ていたが、フランクは女の子を見ておらず、与えられたパンに手をつけることもできないまま常に見られる対象であり続けている。

また、この「第二の祝日」の章では、女の子だけでなくフランクを取り巻く空間の清らかさが章全体を通じて違和感を覚えるまでに強調して描かれている。例えば、ダナムに向かうために乗った馬車の内装を母マーガレットはまるで天国みたいだと感心し、旅行の終盤でフランクは「ここの人たちは天使みたいに親切だね」(I:63)とダナムの人々を形容する。さらに、天国がダナムのような場所なら死んでしまっただけでそこに住みたいなどと言い出す始末である。そして、続く「第三の祭日ミカエル祭」の章ではフランクの葬式の様子が描かれており、フランクは病弱で同情の対象となった末に早死にするという、典型的な障害者像に収まっていることが歴然とする。

その点、「ペン・モーファの泉」のネストは、文学に登場する障害者としては新しい特徴を示している。まず、脇役ではなくヒロインが障害者である。その結果、フランクに比べて障害者の言動や心情の描写が格段に増えている。例えば、母親からエドワードと結婚することができないと明かされたとき、「障害のある身になったのだから、農場主の奥さんになる資格はないのだ」(I:168)という母親の考えを受け入れようとせず、「母に反発し、世間に背を向け」(I:168)ている。フランクのような病弱さではなく、ネストの強い意志に語りの焦点が当てられている。また、献身的に彼女を看護する母親に対しても横暴な態度をとり、母親の配慮に反してきつい肉体労働を強く求めるさまは、障害にばかり注目される自分の体に備わっている能力を誇示するかのようである。

さらに特筆すべきは、ネストが非障害者からの憐れみに対し強い嫌悪感を抱いていることである。彼女は家の外に出るのを拒んだが、それは障害のある自分の体を他人に見られるのを恐れていたからではなく、恋人に見捨てられた者として憐れまれるのが嫌だったからである。そして、「涙やどんな哀れみのそぶりも、足の悪い娘をひどく苛立たせ、母の愛撫さえ彼女は嫌がるようになった」(I:168)とまである。また、人々から尊敬されていたメソディスト派の説教師デイヴィッド・ヒューズは、ネストの力強さを見抜き、彼女に「私はおまえを哀れみはしない。おまえには哀れみなど必要ない」(I:171)と述べる。同情や憐れみの対象と

なることで幸福を感じていたフランクと異なり、やはりネストは他者の憐れみの対象として留まることに満足せず自らの権利を主張していくという、新しい障害者像を提示している。

しかしながら、ギヤスケルは新しい障害者像を「ペン・モーファの泉」で十分に描ききれたとは言い難い。母エレナが亡くなったあと悲嘆にくれるネストは、デイヴィッドから以下のような説教を受ける。

‘... Henceforward you must love like Christ; without thought of self, or wish for return. You must take the sick and the weary to your heart, and love them. That love will lift you up above the storms of the world into God’s own peace. ...’ (I:171)

この説教を聞き、ネストは預言者に会ったかのように畏敬の念に打たれており、彼は実際、彼女にとって預言者だったと述べられている。そしてネストはメアリの保護者になり、共に生活し始める。自分より重い障害を持つ者の世話をすることは、非障害者の母親との生活では成し遂げられなかったネスト自身の能力を示すことを可能にする。だが、「リビー・マーシュの三つの祭日」でリビーにカナリヤを売った男が「病弱な連中が、才能のある賢い奴よりか、愛情を示してくれる奴の方を好きになるってのは、よくある話じゃ」(I:54)と述べるように、ネストがメアリを保護した大きな理由は、自分への信頼感を示してくれたからであろう。持っている能力を周囲に認めてもらおうとするネストの姿勢は障害者として新しいが、自分より障害が重い者に憐れみをかけるという手段は従来の障害者像と何ら変わっていない。

そして、ネストがメアリの世話をする過程は、キースが言う「困難な宗教的あるいは精神的旅に出ること」(38)とみなすことができる。メアリは、ネストのもとに保護を求めてやって来たが、精神が常に安定していたわけではない。メアリの精神錯乱によるひどい発作の恐ろしさを周囲の村人は知らなかったが、それはネストが黙ってひとりで耐え抜いていたからである。ネストは死が近づくと、足が不自由になる前の子ども時代や娘時代の夢を見るようになる。とうとうもう一度あの泉を見たくてたまらなくなり、メアリを連れて向かった美しい泉で、苦しむことなく息を引き取る。彼女の死は、「永遠の生命」(I:175)と表現され、こ

うしたネストの最期はキースが提示した第三の障害者の役割と一致するものである。この点からも、ネストは新しい障害者像を示しきれたとは言えないだろう。しかし、ネストの死は、たとえ強い意志を持っていても、障害者がヴィクトリア朝社会を生き抜くのは困難だったことを表しているのではないだろうか。

3 新しい障害者像

『ルース』のベンスン氏は、非障害者のルースを救うという点で注目すべき障害者である。彼とルースが会うのは、ウェールズの川の石の上で立ち往生していたルースをベンスン氏が助ける場面である。彼らの二度目の遭遇は、ベリンガムに棄てられて絶望したルースが自殺しようとしていた時である。走り出したルースを追いかけていたベンスン氏が転倒し、痛みのあまり叫び声をあげること、自暴自棄になっていたルースは我に返り、自殺を思い留まる。ここでは彼の障害が人の命を救う上で役立っており、欠陥として認識されていた障害が逆に力となることが見て取れる。その後もベンスン氏はルースを自宅で保護し、人生に必要な教養を与え、ルースを立派な母親に成長させる。つまり、ベンスン氏は非障害者をエンパワメントさせる能力を持ち併せた障害者である。ルースは教養を身につけたことでガヴァネスとしての働き口を手に入れ、経済的力もつけ始める。彼女が疫病患者の看護に応募した際も、不安を抱えるルースをベンスン氏は鼓舞しており、精神的支えになっている。この看護行為がきっかけでルースは「墮ちた女 (fallen woman)」であるにもかかわらず、町の人々の感謝と尊敬の対象となるのである。ベンスン氏は、非障害者を支える障害者であり、キースが挙げた障害者の役割に当てはまらない新しい障害者像の一面を示している。

さらに、『メアリ・バートン』のマーガレット・ジェニズはベンスン氏とは異なる新しい障害者像を示しているように思える。両親を亡くし祖父ジョブ・リーと二人で暮らす彼女は、自分の部屋の階下に住むアリス・ウィルソンの紹介でメアリ・バートンと友人になる。マーガレットはお針子として働いていたが、劣悪な労働環境が原因で失明してしまう。しかし、彼女は盲目になった後も孤独になることなく歌手として活躍し、重要な場面では親友としてメアリの支えとなっている。障害者であるマーガレットが自己実現を果たしたうえで非障害者のメアリを支える構図は、これまでに分析してきた短編作品の障害者像やベンスン氏と一

線を描いており注目すべきである。

第一に、マーガレットは経済力を持った障害者である。視力を失いかけていた頃、彼女はお針子としての収入がなくなることを非常に懸念していた。しかし、彼女は美声の持ち主で、音楽講師に認められたことをきっかけに、講師と共に工業都市を巡回し始めてからは、歌うことでお針子時代より多くの収入を得るようになる。そして、メアリを二度も経済的に支える。一度目は、メアリの父が失業しバートン家が貧困に飢えていた時である。マーガレットは、「わたしにはうまく使いきれないくらいお金が入ってくる」(123) と言い、以前より楽に収入を得ていることを告白し、メアリにお金を分け与える。二度目は、ヘンリー・カーソン殺害の容疑をかけられたジェム・ウィルソンの無実を証明するため、メアリがリバプールからアメリカ行きの船舶に乗るウィル・ウィルソンを呼び戻しに行ったり、弁護士を雇ったりするための費用を渡す場面である。

‘... And now I’m going to be plain spoken. You’ll want money. Them lawyers is no better than a sponge for sucking up money; let alone your hunting out Will, and your keep in Liverpool, and what not. You must take some of the mint I’ve got laid by in the old teapot. You have no right to refuse, ...’ (219)

メアリがリバプールでウィルを見つけ出し、裁判でジェムの無罪判決を得ることは、マーガレットの支援なくしては不可能だった。一人で列車に乗ってリバプールへ向かい、出航しかけた船を必死で呼び止めたメアリの行動に注目が集まりがちだが、それを経済面で支援したマーガレットの貢献は非常に大きい。さらに、彼女がお針子だった時よりも、歌手として活躍する時の方が高収入なのは、当時の劣悪なお針子の労働環境、ひいてはそのような女性たちを生み出す社会に対する批判を提示しているようにも思える。

第二に、ジェンダーやセクシュアリティの観点においても、マーガレットは特殊な障害者である。「ペン・モーファの泉」のネストは、足が不自由になった後、片方の足が短くなったり痛みで青ざめたりしている様子が描写され、障害による身体への悪影響が強調されている。一方マーガレットは、失明した後にむしろ女性としての魅力が増していることが言及されるようになる。例えば、ウィルが初

めて彼女に会ったとき、歌声にすっかり魅了されることが述べられている。また、別の場面ではマーガレットの言動の変化や、ウィルの彼女への恋心について詳しい描写がある。

She[Mary] saw as clearly as if told in words, that the merry, random, boisterous sailor had fallen deeply in love with the quiet, prim, somewhat plain Margaret: ... that some inner feeling made the delicate and becoming rose-flush steal over her countenance. She did not speak so decidedly as before; there was a hesitation in her manner, that seemed to make her very attractive; as if something softer, more loveable than excellent sense, were coming in as a motive for speech; her eyes had always been soft, and were in no ways disfigured by her blindness, and now seemed to have a new charm, as they quivered under their white downcast lids. (148)

こうしたマーガレットの外見や内面における変化は、ネストのそれとは真逆のものである。最終的に、マーガレットはウィルと結婚することが小説の最終場面で語られ、婚約を破棄されたネストとの決定的な違いを示している。さらに、ウィルがメアりに恋の相談をする場面で、マーガレットは「天から舞い降りてきた天使」(163)に例えられ、メアリとジョブの口論の最中に現れた際には、彼女の穏やかさが「平和の天使」(234)と形容されており、マーガレットは障害者でありながら女性の理想像を思い起こさせるように描写されている。

第三に、マーガレットは、自身が持っている能力を非障害者から認められている。盲目になった後のマーガレットについては、彼女の障害に関する言及よりも視力以外の突出した能力に関して語られることが多い。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)で同じく盲目になるロチェスターは、視力と同時に屋敷という財産と妻を失っている。彼の盲目は、家父長制社会でジェインとの力関係が逆転するきっかけとなっており、マーガレットと異なって無力さが強調されている。一方マーガレットは、前述した歌唱力に加え、目が見えなくても誰の目が自分の顔に向けられているか感じ取る能力や、一人で歩いて出かける能力も描かれている。初めジョブは盲目の彼女が室内でさえ歩き回ることを心配し、彼女が一人で外出する際には後を付け、安全を確認していた。しかし、

彼女が独力で道を横断し、耳をすまして馬車などの正確な距離を把握できることを知り、その後は安心して一人で外出させている。このように、マーガレットは常に非障害者の保護下にいるのではなく、能力を認められ可能な範囲で自立した生活を送っている。ここから導き出されるのは、歩く能力の有無が障害者のエンパワメントに大きく影響していることである。マーガレットが盲目になっても一人で外出できる一方で、憐れみの対象として描かれたフランクは下半身不随であった。直立二足歩行が可能なのは人間のみであるため、その能力を失うことは、人間にとっての重要な要素を欠くことを連想させる。マーガレットが一人で歩く能力を備え続けたことは、彼女が憐れみの対象としての障害者にならなかった大きな理由だと考えられる。

マーガレットは、ネストが達成できなかった自己の能力を非障害者から認知してもらうことができ、これは彼女のセルフ・エンパワメントにもなっている。その結果、彼女はアリスを亡くしたウィルを慰めるという他者の慰安や、 Barton 家が困窮していた時期に訪問することでメアリの忍耐力と希望を高める役割を果たす。つまり、彼女は非障害者の憐れみの対象としてではなく、むしろ非障害者を支える能力を持つ存在として描かれている。こうした表象は、憐れみの対象であり、本来備わっているべき能力の欠如のメタファーでもあった障害者観を覆すものである。

第四に、周囲からの障害に関する言及が少ない一方で、マーガレットは視力を失った苦しみを自らの言葉で語るができる。⁹ 彼女は、盲目のためアリスの看病ができず、かえって邪魔になってしまうとジョブやメアリに語る。障害者のジェンダーと語りの力に注目する Clayton Carlyle Tarr は、19世紀の小説に登場する男性障害者にとって、障害はその後の人生において困難な課題となる一方、女性障害者は障害を通じて力を得ると述べているが (646)、ギヤスケルの障害者像もこれに当てはまる。その反面、憐れみの対象として描かれていた「リビー・マーシュの三つの祭日」のフランクは、自らの苦悩を自分で語る能力を持っていない。彼が体の痛み苦しむ様子や、身体が衰弱している様子は語り手やリビー、ディクソン夫人、日曜学校の生徒の親たちの目を通してのみ語られている。さらにペンソン氏の障害については、ルースやサリーによって語られるばかりである。Tarr の主張に加え、男性が障害を持つことは、男性障害者の周囲の女性に語る役

割を担わせる効果があると言えるだろう。

このように、マーガレットが社会で自己の能力を発揮し、周囲の非障害者から卑しまれることなく交流している様子は、彼女の盲目という障害（インペアメント）が社会生活を送るうえでの障壁（ディスアビリティ）になっていないことを意味する。Sami Schalk は、フェミニズム運動や障害者の権利運動のおかげで、現代の女性作家たちはエンパワーした女性障害者を作品に描くようになったと述べているが（174）、ギヤスケルはそうした社会運動が起こる遙か前から障害者と非障害者が共生する社会を描いていたのである。さらにマーガレットは視力の喪失により、彼女の歌を披露する場を近所の人々の前からマンチェスター以外の工業都市にまで広げることになった。これは、私的領域に限定されていた彼女の活動範囲が公的領域にまで拡大したことを意味している。『メアリ・バートン』では、メアリが恋人の無罪証明のために奔走し、裁判の証言台に立つことで女性の公的領域への参加を示すだけでなく、障害者のマーガレットも公的領域への参画を果たしていると解釈できる。マーガレットは、「男性障害者より貧困に陥りやすく、リハビリや雇用機会をなかなか得られないという女性障害者」（Goodley 45）という表象に収まらないのと同時に、ヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーまでも克服しているように見える。

結び

ヴィクトリア朝では、障害者は非障害者よりも劣った存在と認識され、社会の構成員として認められない存在であり、結婚相手としても不適だと差別されていた。さらに、経済的に他者に依存しなければ生活ができないなど、様々な点において困難を抱えていた障害者は、人々の同情や憐れみの対象となった。作家たちは、障害者を描くことで作品をより扇情的にすることができた。ギヤスケルもまた、「リビー・マーシュの三つの祭日」をはじめ多くの作品においてヴィクトリア朝の障害者が置かれていた状況を如実に描いていると考えられる。

しかしながら、ギヤスケルは同時代の他の作家と異なり、障害者を弱者として描くことのみにとどまらず救いも与えている。また、ネストのように憐れみの対象となることを自ら拒絶する障害者や、非障害者を支える障害者としてベンスン氏も描いている。このような障害者表象を通して、ギヤスケルは、非障害者が認

識している以上に障害者が能力を持っていることを読者に示そうとしていたのではないだろうか。マーガレットは女性身体障害者でありながら自らの能力をもって自己実現を果たすだけでなく、周囲の非障害者を支えエンパワーさせるという、それまでにない障害者像を示している。マーガレットのような障害者を描くことは、作品を扇情的なものにすることが目的でないと考えられる。こうしたギヤスケルの障害者表象には、ヴィクトリア朝の非障害者が持っていた偏見や先入観を覆し、障害者が非障害者に与える潜在的な力を読者に示すねらいがあったのだろう。ギヤスケルの肯定的な障害者表象は、彼女の社会的弱者に対する深い理解を反映しており、同時代における作家としての先見性を改めて示している。

注

- 1 西垣佐理は、「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」におけるヒロインの障害者看護行為をフェミニズムの観点から考察し、「女性同士の共同体構築という考えにギヤスケルが魅了されたことが『マーサ・プレストン』改稿の動機であった」（226）と述べている。
- 2 UPIAS は、インペアメントを“the functional limitation within the individual caused by physical, mental or sensory impairment”、ディスアビリティを“the loss or limitation of opportunities to take part in the normal life of the community on an equal level with others due to physical and social barriers”と定義した（Goodley 9）。
- 3 長谷川は、「非障害者」という表現を自身で考案したが、のちに障害児教育の先駆者である田村一二が「非障害者」や「非障害児」といった表現を常用していたことを知ったと明かしている（19）。
- 4 本文中の引用の邦訳は、すべて日本ギヤスケル協会編の『ギヤスケル全集2』、『ギヤスケル全集3』、『ギヤスケル全集別巻1』を使用した。参照頁数は Pickering 版による。
- 5 Lennard J. Davis の著作と同様に、文学・文化研究におけるディスアビリティスタディーズを発展させるきっかけとなった Rosemarie Garland-Thomson の *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature* (1997) がある。
- 6 1990 年には米国で Americans with Disabilities Act が、95 年には英国で Disability Discrimination Act が起り、教育や雇用、社会保障などにおいて、障害者に対する合理

- 的配慮が求められた (Burker and Murry xiv- xv)。
- 7 ギヤスケルの「手と心」(“Hand and Heart,” 1849) に登場する足の不自由なハリーは、娘の収入に支えられて生活していた。ここでも本来経済力を持つべき父親が娘の経済力に頼って生計を立てており、障害者の経済的依存性が描写されている。
 - 8 「リビー・マーシュの三つの祭日」で、リビーがフランクの世話を「余った仕事の一つ」(I:67) と形容していることから明らかである。
 - 9 この語りの能力はネストも持ち合わせており、身体障害者になってから不遇な扱いを受けてきた彼女は、足が不自由なまま生きるなら怪我をした際に死んだ方がよかったと嘆く。

引用文献

- Barker, Clare, and Stuart Murray. “Introduction: On Reading Disability in Literature.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 1-13.
- Davis, Lennard J. “Introduction: Disability, Normality, and Power.” *The Disability Studies Reader*, edited by Lennard J. Davis, Taylor & Francis Group, 2013, pp. 1-14. ProQuest Ebook Central, ebookcentral-proquest-com.ez.wul.waseda.ac.jp/lib/ waseda-ebooks/detail.action?docID=1125176.
- Gaskell, Elizabeth. ‘Half a Life-Time Ago.’ 1855. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 3, edited by Charlotte Mitchell, Pickering & Chatto, 2005, pp. 343-82.
- . ‘Libbie Marsh’s Three Eras.’ 1847. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 47-69.
- . ‘Martha Preston.’ 1850. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 117-28.
- . *Mary Barton*. 1848. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 5, edited by Joanne Wilkes, Pickering & Chatto, 2005.
- . *Ruth*. 1853. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 6, edited by Deirdre d’Albertis, Pickering & Chatto, 2006.
- . ‘The Well of Pen-Morfa.’ 1850. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 1, edited by Joanne Shattock, Pickering & Chatto, 2005, pp. 157-75.

- Goodley, Dan. *Disability Studies: An interdisciplinary Introduction*, 2nd ed, SAGE, 2017.
- Hall, Alice. *Literature and Disability*. Routledge, 2016.
- Holmes, Martha Stoddard. *Fictions of Affliction: Physical Disability in Victorian Culture*. U of Michigan P, 2009. ProQuest Ebook Central, ebookcentral-proquest-com.ez.wul.waseda.ac.jp/lib/waseda-ebooks/detail.action?docID=3414670.
- . “Embodying Affliction in Nineteenth-Century Fiction.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 62-73.
- Schalk, Sami. “Disability and Women’s Writing.” *The Cambridge Companion to Literature and Disability*, edited by Clare Barker & Stuart Murray, Cambridge UP, 2018, pp. 170-84.
- Tarr, Clayton Carlyle. “Abnormal Narratives: Disability and Omniscience in the Victorian Novel.” *Victorian Literature and Culture*, vol. 45, no. 3, Cambridge UP, 2017, pp. 645-64. doi:10.1017/S1060150317000110.
- 石川准・長瀬修、『障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ』、明石書店、1999年。
- 長谷川潮、『児童文学のなかの障害者』、ぶどう社、2005年。
- 西垣佐理、『『マーサ・プレストン』と『一時代前の物語』——看護がもたらす『自立』と『共生』——』、『没後150年記念エリザベス・ギヤスケル中・短編小説研究』、日本ギヤスケル協会編、大阪教育図書、2015年、219-28頁。
- ロイス・キース、『クララは歩かなくてはいけないの？：少女小説にみる死と障害と治癒』、藤田真利子訳、明石書店、2003年。

(早稲田大学大学院生)

Elizabeth Gaskell's Representation of Characters with Disabilities

Shino HOSHI

This paper explores how Elizabeth Gaskell depicted characters with disabilities in her fiction and what kind of roles they bear. I analyse six of Gaskell's works: 'Libbie Marsh's Three Eras' (1847), *Mary Barton* (1848), 'Martha Preston' (1850), 'The Well of Pen-Morfa' (1850), *Ruth* (1853), and 'Half a Life-Time Ago' (1855). Disability studies has been recognised as an academic discipline since the 1960s. Literary and cultural studies began to incorporate disability studies in the 1990s, but most existing studies have discussed contemporary novels or American literature. Even though Gaskell described various characters with disabilities in her fiction, they have not been focussed on in previous studies. In the Victorian era, most people regarded those who had physical or mental impairment as inferior, and many novelists depicted characters with disabilities with the goal of arousing pity. In fact, Gaskell describes Frank Hall in 'Libbie Marth's Three Eras' as an object of mercy. However, Margaret Jennings in *Mary Barton* and Thurstan Benson in *Ruth* do not seem to play the same role. Unlike the other characters with disabilities, these two are depicted as powerful characters who can support their acquaintances. Mr Benson saves Ruth when she attempts suicide, educates her, and encourages her to work as a nurse. Consequently, Ruth is able to enter the public sphere and earn the respect of many people in the town despite the fact that she is perceived as a fallen woman. Moreover, Margaret is economically independent and has a beautiful voice that she utilises as a singer. She uses her funds to support her friend, Mary Barton, when Mary is poor. Hence, not only does she achieve self-actualisation, but she makes her friends empowered. This paper clarifies the fact that Gaskell was unique among the Victorian novelists in demonstrating the abilities of people with disabilities in order to overcome discrimination against them.

日本ギヤスケル協会（編） 『創立 30 周年記念 比較で照らす ギヤスケル文学』

大阪：大阪教育図書、2018 年、4,000 円、288 頁

直野 裕子

本書は、日本ギヤスケル協会創立 30 周年を迎えるにあたって企画された記念論文集である。収録された論文は 20 編、3 部構成で、第 1 部「ギヤスケル世界の真価と発展」（6 編）、第 2 部「同時代人と切り結ぶ」（6 編）、第 3 部「時空を超えての交流」（8 編）からなる。順不同で見たい。

ギヤスケルの代表作『クランフォード』を論じたのは 3 編。冒頭の章で、足立万寿子氏は、ニューマンの「紳士論」と異豊彦の「紳士像」を援用しながら、クランフォードの住人それぞれの行動・発言・心理から窺える「紳士性」と「人間性」を検証し、最後に町の住民ではなく庶民階級の、クランフォードの世界を客観視できる語り手メアリ・スミスに「マティーさんのそばにいと皆『いい人間』になったような気がする」と言わせていることに注目する。「いい人間」とは、キリストのような人が想定され、紳士階級であっても知性・教養の点では庶民並のミス・マティーをキリストのような慈愛に満ちた人物とし、人の価値は「紳士性」ではなく「人間性」にあることが示されていて、そこにギヤスケルの紳士概念の真髄をみる。手堅い論考である。大前義幸氏は、喜劇的作品として漱石の『吾輩は猫である』と比較し、二つの作品に共通する喜劇的表現法を探る。人間とは異次元の世界にある猫を語り手としたその効果について詳細な分析がされるが、メアリ・スミスの語りの分析は少々物足りない。漱石は『文学論』で、例のディケンズとジョンソンを巡ってミス・ジェンキンズとブラウン大尉が大論争する箇所を引用しているが、劉熙氏は、伍光建の中国語訳『克蘭弗』（1927）では、1919 年の五四運動の結果大きく変革した中国社会に受容され易いように、内容上の修正が加えられていると指摘し、その例としてこの論争場面を取り上げる。訳

者が注を付けて自分の解釈を入れるのは当時よく行われたことで、ディケンズを褒めるブラウン大尉に対して、ディケンズをけなしジョンソンを模範にすべきだと偉そうに言うミス・ジェンキンズを‘very pedantic and antiquated’と訳者がけなすのは、印刷技術の進歩や識字率向上の波に乗り、下層階級にまで読者層を広げたディケンズを評価し、中国でも印刷技術や言語が改革され、古臭い伝統や文学にとって代わるべく外国作品を平易な口語に翻訳し読者層を広げようとしたからだを見る。この古いものを排除しようとする姿勢に比して、ヴィクトリア朝の社会変化を認めながら古いものも排除せず共存をよとするギヤスケルの態度を‘ambivalent’とみなす。

『メアリ・バートン』は出版当初、経営者と労働者の対立を激化させていると批判されたが、江澤美月氏は、ギヤスケルを高く評価した雑誌『エグザミネー』の編集者リー・ハントに注目し、彼が中流階級や労働者階級の生活を圧迫するトーリー党の保護貿易政策「穀物法」の撤廃に貢献した人物で、バンフォード（暴力的側面を持つチャーチスト運動と袂を分かった労働者階級の反穀物法論者）やフォックス（マンチェスターの中流階級の反穀物法論者）を高く評価したこと、この二人をギヤスケルが支持していたことがリー・ハントとの書簡のやり取りから窺えることから、この小説が階級間の対立ではなく融和を目指していることを明らかにする。松浦愛子氏は、劇作家D. ブーシコーによる『メアリ・バートン』の翻案劇『ロング・ストライキ』（1866）を取り上げ、ハビトゥス概念を援用し、当時の劇評を多数分析して観客の受容の実態を明らかにする。ウェスト・エンドの観客が共感し涙する同じ場面で、イースト・エンドの労働者たちは抱腹絶倒するなど中産階級とは違う反応を示していると指摘し、『メアリ・バートン』は労働者の生活をリアルに描いていると一般に評価されているが、実際は虚構であったことが労働者の反応から見受けられるという。石塚裕子氏の論考も、『メアリ・バートン』のリアリズムの実態を問うもの。メアリが出会う人たちはみな善良で、行く先々で親切に助けられ万事うまくいくリヴァプールは、メルヴィルの『レッドバーン』の舞台、奴隷貿易の拠点であり多文化の錯綜する国際都市リヴァプールとは明らかに異質で、それはギヤスケルが黒人を描かなかった点に典型的に表れていると見る。ギヤスケルの意識の中でのリヴァプールは、「ナッツフォードと変わらぬ信頼するに足るコミュニティで、家父長制度の保護のもと正義の支配

するコミュニティの規範に守られると信じているようで」、田舎のコミュニティを離脱した孤独な個人、よそ者の集まりの都会は、「中産階級の女性ギヤスケルには、この時点ではまだ（と論者は注意深く限定している）縁の薄い世界で、人種差別が露骨な形を取るのアメリカ……イギリスではヴィクトリア朝お上品文化に隠され見え難くされていただろうし、小説は家庭で読まれることを前提としていたからであろう」と結論づける。

『ルース』は、「墮ちた女」の救済問題を扱った社会小説の範疇には収まらない作品として様々な読み方がされてきたが、芦澤久江氏はルースの激しい懊悩、自己矛盾に焦点を置き、『ジェイン・エア』のジェインや『嵐が丘』のキャサリン、あるいは意識の流れ手法を使うV.ウルフの小説とも比較して、また新たな『ルース』の読みの可能性を論じる。西村美保氏は家事使用人サリーに焦点を当て、「墮ちた女」と「善良な女」の対比を通してサリーの役割を綿密に検証。健全な判断力・倫理観を備え勤勉で主人に忠実なサリーは「善良な女」の権化で、「墮ちた女」の地位の低さを示すだけでなく、情報の提供者、さらにルースの生き様と世間の冷たい仕打ちについての証言者となる。「ギヤスケルが世間全体に対する間接的な抗議の言葉を社会の片隅に生きる女性使用人に語らせていることに注目した」好論文である。宇田朋子氏は『ルース』をM.ドラブル『礪白』（1969）と比較する。社会への鋭い観察眼を備えるドラブルのリアリズムがヴィクトリア朝小説への憧れから生まれたこと、両ヒロインとも未婚の母で、イギリスで婚外子が嫡出子と同等の権利を得るのは家族法改正（1987）後であることを示した上で論を進める。時代の隔たりは100年以上、社会状況も違うが、社会常識に乏しかった両ヒロインが、妊娠して産むと決心し以後一般社会の常識を学び人間的に成長し、父親と一緒に暮らせる機会があったのを拒絶する点などに共通点を見る。濟木愛子氏は『ルース』と『シルヴィアの恋人たち』から、「水」に関連するイメージを抽出し、登場人物との関連性を分析。「流れのない水」のイメージがルースの悲しみ・拒絶・絶望を描写する場合に用いられる傾向があり、『シルヴィア』では海に関連する「流動する水」が中心で、外的・内的意味を表す修飾語が付くものが多く、シルヴィアの喜怒哀楽は水のイメージに結びつく指摘する。

鈴木美津子氏は、ディズレイリの『シビル』（1845）と『北と南』（1855）のプロット展開、作品の枠組みなどを分析し、両作品が国民小説の特徴をもつことを指摘

し、その共通の影響源を探る。支配層には博愛を労働者には服従を説く青年イングラッド党の政治理念が織り込まれた『シビル』、ギャスケルのユニテリアンとしての政治的・宗教的思いと批判（英国国教会が非英国国教徒に歩み寄る寛容さが必要だという思いと、南部の英国国教徒中心で行う政治への批判）が示される『北と南』、政治的メッセージは対極にあっても、両作家とも若い頃最も人気のあったスコットの国民小説を読破し、その「プロット展開、枠組み、小説技巧に魅せられ…構造や技巧の似通った作品を生み出すことになった」のだろうという。詳細な分析と検証に基づいた手堅い論考である。木村正子氏は、ギャスケルのナイチンゲール姉妹との交流が、『北と南』執筆にどのような影響をもたらしたかを、これまで看過されてきた姉パーセノップとの親交に注目しながら考察する。ギャスケル作品におけるヒロイズムは、「ヴィクトリア朝の〈家庭の天使〉の行動指針である自己犠牲と他者への献身の実践」と「神への奉仕に示される愛の実践」であるが、神の召命を受け狭く閉鎖的な家庭空間からの脱却を目指し、看護活動に専念するカリスマ的英雄のフローレンスに対して、その活動を献身的に支える家庭の天使的姉パーセノップ、そのどちらについても行き過ぎを肯定しないギャスケルは、マーガレットに両方の役割を担わせ、「強い意志で決意するだけでなく、感謝して祈ることも真の英雄の条件だ」との認識に至らせ、「活動と休止/沈思」というバランスの取れた新しいヒロイズムのもとに社会活動に入らせていくのではないかと結論づける。

松岡光治氏は、作品の時代が1840年の郵政改革以前と以後に設定されたディケンズとギャスケルの作品を取り上げ、プロットの仕掛けとしての手紙と犯罪、特に脅迫の問題に焦点を置いて両作家を比較する。『妻たちと娘たち』（1820年代設定）の土地管理人プレストン、『ルース』（1830年代設定）のベリンガム夫人も息子も、その罪は赦される。ディケンズの『リトル・ドリット』のリゴー、『互いの友』のライダーフードなど良心のない悪人の脅迫は因果応報で処罰される。とりわけ手紙が作品の構成やテーマに深く関わる『荒涼館』（1852-53）の、準男爵デッドロック家の顧問弁護士タルキングホーンの脅迫は、金銭や愛情に関係しない心理的・精神的なもので、その複雑なメカニズムについての詳細な分析は圧巻である。『ドンビー父子』（1846-48）以降、ディケンズの悲観的な社会観がさまざまなイメージや象徴で示されるが、ギャスケルの場合、『クランフォード』（1851-

53) の語り手メアリ・スミスが、「ピーターの母親が出しても届かなかった過去の古い手紙を受け継ぎ、新たに書き直した手紙を送って」彼をインドから帰国させ肉親関係の断絶を修復するという「郵政改革の功績を体現させるようなプロット」を展開させていることから、「ギヤスケルは基本的には未来志向の楽観主義者」と見る。果たしてそう言い切れるかどうか、今後の課題でもあろう。

一般に歴史小説と見なされる『シルヴィアの恋人たち』を、西垣佐理氏はフィリップの恋愛物語として読み、その恋と挫折の顛末を、ディケンズの『大いなる遺産』のピップの場合と比較することによって、ヴィクトリア朝イギリス社会での男性性確立の問題を考察する。男性性確立に必要な三要素のうち、「仕事」で一定の成功をおさめても、「家庭」（恋愛や夫婦関係）では、両者共、相手の女性を偶像視し一方的利己的思い込みで愛そうとして挫折。その後の運命が大きく異なるのは、もう一つの要素「男性同士の絆」の有無にあり、ピップには義兄や男性の友人との絆があって挫折から立ち直れるが、フィリップにはそのような絆がなかったために、悲劇的結末を迎えることになり、その意味で、この作品は男性的恋愛の破壊的側面を徹底して描いたものであるとみなす。死の間際に、フィリップとシルヴィアが互いに非を認め赦しあう点を重視するのが大野龍浩氏の論考“Moralization in Elizabeth Gaskell’s Later Fiction”である。多くの批評家の、ギヤスケルの教訓主義の要素は創作技量が円熟するにつれて減少するという見解に異議を唱え、後期の作品 *Sylvia’s Lovers*, *Cousin Phillis*, *Wives and Daughters* においても、一貫して教訓主義 (moralization/didacticism) は存在し浸透していることを、テキストを聖書に照らし合わせながら丁寧に跡付け、それはギヤスケルが作品を信仰告白の手段にしているからだろうと結論づける。

次に中・短編についての論文に移ると、石井明日香氏は、乳母が語り手である「ばあやの物語」と『嵐が丘』を取り上げ、「ばあやの物語」には、『嵐が丘』にはない語り手と主人との信頼関係があり、両者間の愛情と協力の可能性が強調され、そこにギヤスケルの独自性を見る。興味深い論考だが、もう少し整理して論を進めてほしい。太田裕子氏は、ギヤスケル同様ユニテリアンで18世紀末から19世紀初頭に活躍し高く評価されたが、長らく看過されていて最近再評価され始めたロマン派詩人アナ・バーボルド (1743-1825) の詩を引用して、その思想・社会観を詳細に解説。ギヤスケルが「私のフランス語の先生」、『ラドロウ卿の奥

様』の時代設定をバーボルドの活躍した時期にした、その真意を考察するという最初に掲げた目的が、スペース不足からか、十分果たせていないのが惜まれる。猪熊恵子氏は、短編集『ソファを囲んで』（1859）が、雑誌に連載された既出の短編をただ寄せ集めただけのものではなく、ギヤスケルが巻頭とそれぞれの作品間に杵物語の構想を挿入することにより、6作品が円環的に繋がって新たな作品世界を創り出していることを丁寧に跡づける。「杵」部分の語りを引き受けるミス・グレイトレックスは、病氣治療にエディンバラに行き主治医の姉、障害を抱えソファに寝たきりのミセス・ドーソンの知己を得て、彼女の周りに集う知識人たちそれぞれが語る話に耳を傾け、書き留める（『ブロンテ伝』への猛烈な抗議、次女の婚約解消も加わり心身ともに疲弊したギヤスケルと傷心の娘の姿も重なる）。それぞれの語る物語群は、それぞれに響き合い重なり合い溶け合い、その繰り返しの中で、語る者も聞く者も少しずつ癒されていくという。新たな作品世界が創出されていくメカニズムを詳細に分析し読み解いた優れた論考である。

木村晶子氏は、ギヤスケル同様、ユニテリアン派知識人の間で育ったアン・ラドクリフの『ユドルフォの謎』を取り上げ、ギヤスケルがこの作品をどのように継承しているかを考察。中・短編ではラドクリフの作品設定やモチーフ、人物像が取り入れられるが、ラドクリフの亡霊には後に合理的説明がされるのとは違い、ギヤスケルの亡霊は、現実において隠蔽された心理の深層や闇に葬られた悪を露わにする機能を持ち、家父長制の矛盾や不正が表現され、リアリズムによる長編では描けなかった深層心理や抑圧されたセクシャリティが投影されており、ラドクリフの最も肯定的な「ヒロインの成長物語」というプロットを継承しているのは、労使対立を軸としたリアリズム小説『北と南』であると指摘。時代風潮の相違も視野に入れ、詳細な分析がされた説得力ある行き届いた論考である。

鈴江璋子氏は、「アメリカの奴隷制度廃止に向けて」ギヤスケルが最もはつきりした態度を示したものとして、冒頭に、弱冠26歳でただ一人の白人指揮官として、初めて組織された黒人連隊を率い、最前線で戦死した北軍の大佐への追悼文『ロバート・グールド・ショウ』（1863）を取り上げたと思われる。青年の死を悼みその母の嘆きを思いやる個人的なものと従来考えられているが、政治的見解を含まないとは言いきれない。ギヤスケルはもともとキリスト教徒として奴隷制度に反対しているが、「言葉によって論理的に提案された、しっかりした、明

瞭な、実際のな<行動の道>があるのでなければ」(U319)と述べた言葉を引用し、奴隷解放運動には積極的ではなかった理由を示唆する。『アンクル・トムの小屋』(1852)がアメリカだけでなく、世界的に反響を巻き起こし奴隷制批判が高まり、ストウは招待されてイギリスを訪問し、ギヤスケルとも出会う(1853)が、二人の関係は表面的なもので終わる。それは、ギヤスケルは職人氣質、ストウは直感・直言型という「氣質の違い」からだと見る。両者とも乳幼児期に実母を失い、母となっては幼い男児を疫病で失うなど共通点が多いが、後の家庭に特に問題がなかったストウに比して、ギヤスケルは父親と後妻の家に入れられず心に深い傷があると指摘し、「家庭小説の中に物の怪が潜むような感覚、失踪のテーマ、生霊などを持ち込み」、「人間の裏面を書くことができる」優れた作家だと高く評価する。この論考は、ギヤスケルが好きだった「豊かな広がりを持った話」「いろいろ話が詰まった」物語のようで、楽しく読むことができた。

日本ギヤスケル協会創始者山脇百合子先生は、この記念論文集を手になされて、さぞお喜びになっただろう。百歳の天寿を全うされたのはその半年後のことであった。2010年、15年、そして18年出版の論文集すべてに執筆されたのは、編集委員長を3度とも務められた大野龍浩氏を含めて9名である。その並々ならぬギヤスケル愛好家魂に心から敬意を表したい。

どの論考もギヤスケルの作品の新たな面を浮かび上がらせたり、思いがけない読みを示したりして、大いに刺激を受けた。各論文は独立したものであるが、他の論文と共鳴し重なり合い補完し合って、ギヤスケルの多様性、豊かさを彷彿させる。次のステップを目指そうという熱意と意欲に溢れた論考が多かったが、少々気になることがある。選んだテーマは秀逸で資料も豊富、英語はよく読めていると思われるのに、日本語の文章がわかりにくい、そんな論文が散見される。ぜひわかりやすい日本語を書くようにしていただきたい(自戒をこめながらの提言です)。

(甲南女子大学名誉教授)

日本ギヤスケル協会会則

第一条 (名称)

本会は日本ギヤスケル協会 (The Gaskell Society of Japan) と称する。

第二条 (事務局)

本会の所在地は事務局とし、事務局は原則として事務局長の所属する研究機関に置く。

第三条 (目的)

本会はエリザベス・ギヤスケルの文学および関連分野の研究に寄与し、あわせて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 総会および全国大会の開催
- (2) 研究会、講演会その他の会合の開催
- (3) 機関誌、ニューズレター、その他の刊行物の発行
- (4) 国内外各種研究団体との交流
- (5) その他必要と認められる事業

第五条 (会員)

本会は原則として、本会の趣旨に賛同して入会した個人をもって会員とする。なお本会の目的、事業に賛同する法人を賛助会員とすることができる。会員の入会・退会は役員会がこれを審議し承認する。会員は所定の会費を毎年度末までに納入しなければならない。

第六条 (組織)

本会に次の議決機関および執行機関を置く。

議決機関

- (1) 総会
- (2) 役員会

執行機関

- (1) 各種委員会
- (2) 事務局

第七条 (役員、名誉会長、名誉会員)

1. 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 1名
- (3) 幹事 若干名
- (4) 各種委員会委員長各1名
- (5) 事務局長 1名
- (6) 会計監査 2名

2. このほか役員会の推薦により、名誉会長、名誉会員を置くことができる。

第八条 (任務)

役員は任務を次のように定める。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 幹事は会務の運営にあたる。
- (4) 事務局長は事務局を統括する。
- (5) 会計監査は会計を監査する。

第九条 (選任・任期)

役員を選出方法および任期を次のように定める。

- (1) 役員のうち、会長・副会長および幹事は、役員会の推薦にもつぎ総会において選出し、事務局長・各種委員会委員長および会計監査は、役員会において選出する。
- (2) 役員の任期は2年とし、連続2期4年を超えて重任しない。ただし会長・副会長・事務局長の任期は就任時から始まるものとする。会長の任期は2期4年を限度とする。

第十条 (総会)

- (1) 総会は本会の最高の議決機関であり、毎年1回会長が招集する。ただし会長が必要と認めるとき、または会員の3分の1以上の要求があったとき、会長は臨時総会を招集する。
- (2) 総会の議決は出席会員の過半数とする。

第十一条 (役員会)

- (1) 役員会は本会会則および総会の議に沿って、本会の目的達成に必要な事項の企画および審議決定にあたる。
- (2) 役員会は第七条第1項(1)から(5)に記した役員によって構成され、会長が招集する。
- (3) 役員会は各種委員会を組織することができる。

第十二条 (経理)

- (1) 本会の経理は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってあてる。
- (2) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終了する。
- (3) 本会の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会において行う。

第十三条 (メーリング・リスト)

本会の情報交換のために、メーリング・リストを開設する。原則として全会員が登録され、自由に投稿できる。ただし、問題が生じた場合には会長の権限で停止することもあ

第十四条 (会則の改廃)

本会則の変更は総会の議決を経なければならない。

付則

この規約は昭和63年10月16日から実施する。この改定規約は平成4年10月18日から施行する。この改定規約は平成16年10月3日から施行する。この改定会則は平成17年10月2日から施行する。この改定規約は平成18年10月1日から施行する。この改定会則は平成19年6月2日から施行する。この改定会則は平成28年10月1日から施行する。

本会は事務局を、〒422-8545 静岡県駿河区池田1769 静岡英和学院大学短期大学部芦澤久江研究室に置く。

編集後記

『ギヤスケル論集』第30号をお届けします。今号は、2019年9月9日に逝去された松村昌家先生追悼号です。鈴江璋子先生と現ギヤスケル協会会長大野龍浩先生に追悼文を書いて頂きました。また、矢次綾先生から松村先生の写真を提供して頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。編集委員一同、松村先生のご冥福をお祈りいたします。◆第31回例会・大会でのご講演を論文として寄稿して下さいました足立万寿子先生と鈴木美津子先生に感謝申し上げます。◆投稿論文は2本で、2本とも審査を経て本号に掲載されました。論文の掲載順は、ご講演に基づく論文・投稿論文共に、慣例に従い執筆者のアルファベット順です。次号以降も多くの投稿があることを願います。◆書評は日本ギヤスケル協会が編集した書籍に関するものです。『論集』では、ギヤスケルに関連する新刊書をできるだけ書評に取り上げます。希望の書籍がございましたら、編集委員会までご一報ください。(西垣)

ギヤスケル論集第30号

2020年10月31日 印刷

2020年11月12日 発行

発行者 大野 龍浩

編集者 『ギヤスケル協会』編集委員会

発行所 日本ギヤスケル協会

〒422-8545

静岡県静岡市駿河区池田 1769

静岡英和学院大学短期大学部

芦澤久江研究室内

ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

印刷所 株式会社篠原印刷所

〒422-8033

静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 番 5 号

TEL:054-286-5141 FAX:054-285-6261

『ギヤスケル論集』投稿規程

【資格】投稿者は日本ギヤスケル協会会員であることを原則とする。

【内容】原稿はエリザベス・ギヤスケル、およびその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。ただし、すでに口頭発表し、その旨を別紙に明記している場合には審査の対象とする。

【執筆要項】

- 1) 書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に準ずる。
- 2) 原稿は原則として Microsoft Word で作成する。執筆用テンプレートが協会のホームページにあるので利用されたい。
- 3) 日本語原稿の場合は 14,000 字以内とし、別に英訳題名をつけ、200 ～ 300 語程度の英文による要約をつける。
- 4) 英語原稿の場合は 6,000 語以内とする。要約は不要。
- 5) 日本語原稿、英語原稿とも、題名、注、文献目録その他一切を規定文字数のうちに収める。
- 6) 注は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号にはカッコは使用しない。Word の参考資料メニューの脚注および文末注の挿入機能を使用しない。

【締切】4 月末日。

【提出】1) 原稿の印刷コピー 1 部を事務局に提出する。同時に、ファイルを電子メールに添付して事務局に送付する。氏名は原稿には記載しないこと。
2) 英文要約（和文論文の場合）3) A4 の用紙に、氏名（日本語、ローマ字表記）、タイトル（日本語・英語）、所属・職名（日本語・英語）、連絡先を記したもの。原稿は返却しない。

【審査】原稿掲載の可否は編集委員会が決定する。審査の公平と査読者の自由な知見を守るために、査読者の氏名は公表しない。

【校正】執筆者の校正は初校までとし、訂正加筆は印字上の誤りのみとする。

細則

1. 論文執筆者には『論集』5 部、論文以外の（エッセイや書評など）執筆者には会員 1 部、非会員 2 部および各論文、記事等の PDF を進呈する。なお、執筆者が希望すれば、実費（含送料）にて抜刷購入可とする。
2. 執筆者に掲載料の負担が発生する場合がある。
3. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。
4. 英文の論文および要約の原稿は英語母語話者のチェックを受けること。

※尚、この投稿規程は 2020 年 10 月 10 日改定、2021 年 4 月 1 日より施行。

Gaskell Studies

Vol. 30

— CONTENTS —

In Memoriam: Professor Masaie Matsumura

- Professor Masaie Matsumura: His Love for Manchester and Osaka
..... Akiko SUZUE 1
- See You in the Next World, Professor Matsumura!
..... Tatsuhiro OHNO 5

Lectures

- Cousin Phillis* Reconsidered: Focusing on “Prayer”
..... Masuko ADACHI 7
- The Women Who Reject a Marriage Proposal: Maria Fluart, Ida
Rosemeli, Elizabeth Bennet, and Margaret Hale
..... Mitsuko SUZUKI 23

Articles

- Elizabeth Gaskell’s Representation of Characters with Disabilities
..... Shino HOSHI 39
- The Presence or the Absence of Blacks in the mid-19th Century English
Novels: *Cranford* and *Vanity Fair*
..... Hiroko ISHIZUKA 57

Review

- The Gaskell Society of Japan, ed., *Shining a Light on Gaskell Studies
through Literary Comparison: Commemorating the 30th Birthday
of the Gaskell Society of Japan*
..... Hiroko NAONO 73